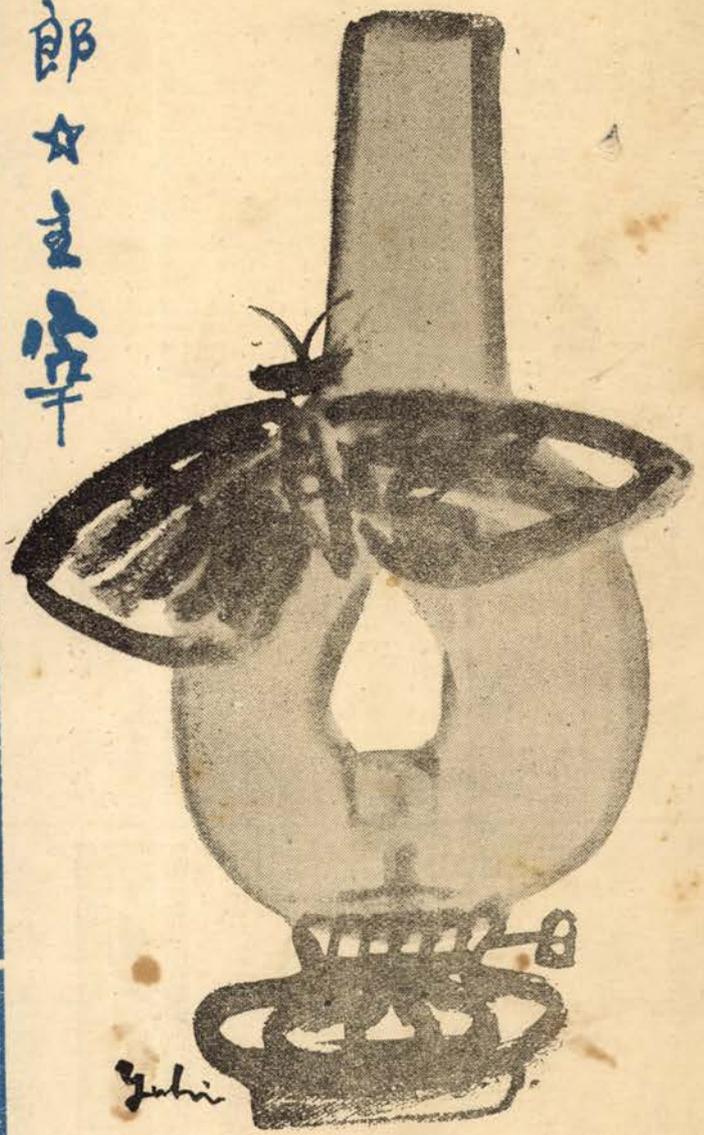


昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可（毎月一回二日発行）
創刊大正十三年・通卷二百九十三号

Pensoj flugas trans la land-limon
The Senryu Zasshi

No. 293

麻生路郎☆主筆



川

柳

の雅

証

十月号

十月号目次

題字……………麻生・路郎
表紙……………由比種三郎

川柳航路……………路郎・亞鈍・鮎美
野介・豆秋・梨里……………(一)

末弘博士逝く……………麻生 路郎……………(三)

男性の更年期物語……………藤本 潤年……………(五)

不朽洞賞把持者の横顔……………種 瓜平……………(七)

徳川家康と金扇の馬橋……………阿達 義雄……………(九)

実録三題ばなし……………東野 大八……………(一四)

川柳漫 釈(3)……………小畑自由朗……………(一九)

作家論「黒本芳泉」……………福田山雨楼……………(二二)

窓 口 談 義……………麻生 路郎……………(二六)

BK放送川柳……………須崎豆秋通……………(二七)

詠史川柳「につぼん」(12)……………戸田古方……………(二七)

不朽洞喫煙室……………鮎美・豆秋・十九平
柳慶・夕鐘・栗……………(三二)

飛燕往來……………(六・一六)

不朽洞句帖……………麻生 路郎……………(三三)

近作 柳 欄……………麻生路郎選……………(三四)

川 柳 塔……………麻生路郎選……………(三六)

同舟近詠……………諸 家……………(三三)

一路集「バス」……………尼 縁之助選……………(三三)

各地 柳 壇……………上田 翠光選……………(三五)

動 柳 靜……………(三七)

不朽洞会から……………(三九)

編輯局にて……………(三九)



窓口談義

麻生路郎

講和会議もすんだ。無事にすんだのか、兎に角すんだのか、ウヤムヤにすんだのか、私たちにはハッキリしたことは判らない。私たちにはハッキリ判らない方がい、のかも知れないが、もう少しハッキリ判つてもいい、ような気がする。講和がすんだらお互いの生活はモット苦しくなるのだと云うことだけは間違いないらしい。何れにしても私たちの生きている間に生活が楽になるとは考えられない。そうなる、苦しい生活の中で、その苦し味を苦し味と感じない生き方をしなければならぬ。税金があがると尤だと思、それが拂えないのも尤だと思、物價があがると尤もたと思、欲しいものが買えないのも尤だと思つて一切はあわてないことである。いくら尤だと思つても、拂えないものは拂えない。自動車の運転手をなぐり殺して、税金を拂い、買いたいものをかうのでは、運転手がたまらない。

夕日の美しさを感じる心は誰でも持つているが、誰でも感じているとは限らない。夕日の美しさを感ずるヒマさえも持たずにアクセクしている人が多いことを悲しむ。川柳が作れない筈だ。

文化の日が近づいたが、何れドラ縄式の儀し物が多いことである。恒例の京阪神三都市交歓川柳大会も会ギリ／＼にならればプロも出来上らぬらしい。色々問題もあるが、費用の負担は同じ様に出したくない。役員は同じように出したいと云うのでは実土のスエヒロ博士を苦笑させるに過ぎないだろう。世話役も骨が折れることとお察しする。この調子では私の方の雑誌にはプロが掲載出来ないかも知れないが、いつ出来るか判らぬプロを待つて掲載するほど、ノンキな雑誌でないの、とえ載らなくても悪しからずと前以つておことわりしておく。ゴタ／＼しても金は開くに間違いない。開く以上はよい意味の盛会にしたいものである。今の夏アプロで決定しているのは麻生路郎の講演だけである。大いに來援を願いたい。

ちみちに働いてノンキに暮らすことである。アクセクしないことである。税吏がニギ／＼でセイタ

本社十月旬会

日時・十月六日(土)午後六時
会場・大宝文化会館
大阪市南区三休橋南詰東入

兼題・「囲碁」「怪我」「腕時計」各三句
席題・柳話・句評等
会費・五〇円
川柳雑誌社

麻生路郎著 水武書房版



川柳研究に人いたしに 柳指導に人も適する

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。
「川柳とはどんなものか」から説き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにどつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版二二二頁

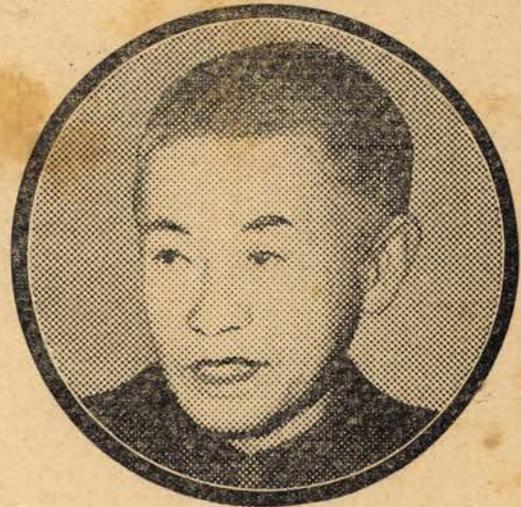
定價 一〇〇圓
送料 金十二圓

取次御法文は

川柳雑誌社

大阪市住吉区南船場四丁目五番五番地

電話日電大阪七五〇五〇



末弘博士の逝去

本誌並びに川柳不朽洞会の賛助、末弘嚴太郎博士が九月十一日午前四時八分に東京都世田谷区宇奈根町七九一ノ自宅で長逝された。行年六十二

博士は直腸癌の手術後、自宅で静養されていたのであるが遂に起たれなかつたのである。「文藝春秋」で直腸癌は癒ると云うようなことを執筆されていたが、その通りであればよいがとひそかにお案じ申上げていたが願はない結果となつた。悼むに言葉もない次第である。

博士と本誌との関係は、私がかつた本誌の創刊号（大正十三年二月）に「末弘博士の『暴政は人を皮肉ならしむ』を読む」を執筆したところが、二号に「創刊号を讀みて」を寄稿されたのは始まり、その後本誌並びに不朽洞会の賛助を快諾され多年支援していただいたのである。博士は中学時代には俳句に親しんでいられたそうであるが、東大法学部の教授時代には川柳に理解の深い穂積重遠博士と机をなべていられたので川柳に親しむをもたれたのであつた。博士の著書に「嘘の効用」などがあるのも、川柳に親しむを持たれたあらはれに外ならぬと思う。

博士は大分縣の出身で明治四十五年東大独法科を卒業され、大正三年同学助教となられ、同七年スイス、佛、伊に留学、同九年法学博士、同十年教授、昭和八年法学部長、日本体育会副会長、日本水連会長、労務審議会委員を経て昭和二十一年三月中労委の発足と共に会長代理、翌年十月初代会長となられ四年間会長に就任されていた。中労委の育ての親として戦後の激動期にあつた労働争議の仲裁に当られたが、資本家には相談役、組合の人たちには最良の助言者である云う公平な親切な態度でのぞまれたので、これからの日本を背負う博士の計は各方面から深く悼まれている。博士は二十一年十月に覚書該当者として教職追放になり、九月十日遂に解除されたが既に混睡状態になつていられたので解除を知られずに世を去られたのであつた。（路）

不朽洞句帖

麻生路郎

悼 末弘博士

永久に労資は労資博士逝く

老人の日だが電車で立たされる

KKの庶務が日の丸買いにゆき

独り身え余所の時計が鳴るのなり

妻だけがまつる神様佛様

彼の死にかかわりもなし午後太陽

母堂の御永眠をき、

南捨舟博士夫妻に

次の間に在ますが如き日もあらむ



川柳航路

談座

出席者

麻生路郎

高鷺亞鈍

水谷鮎美

大西野介

司會 須崎豆秋

筆記 麻生梨里

鮎美 結構ですが私はこう思う。これは川柳以外では言へない句語であると思う。亞鈍さんは「中に生く」に於て川柳として拾ひ上げられると言はれましたが、「右砂糖」は過去を偲び「左塩の中に生く」はオールI.N.Gです。すなはち(亞鈍、はあ成程と、一人うなづく)川柳マインである。

野介 此の句は非常に概念的な句だと思ふ右砂糖、左塩と言ふ様な一つの対比の中に色んな解釈が成立するでありませうが、結局作者が頭の中で考へられたものが現実には足がさびて居ない。川柳の成立する場所は、あくまでも現実の位置であり、こうした対比は本道からそれるものであると思ふ。もつと(への中に生く)作者の苦悩を具體的、現実的に表現してもらひたかつた。結局この句は作者の意図が先に走つて燃焼の足りない失敗作じやないかと思ふ。

美 美 二そこでネ。一寸考へてもらはなければならぬことは、我々は作家の段階と言ふことも一應は考へねばならぬ。

鮎美 美 二それがネ。久留美氏の場合は連作でないと思ふ。亞鈍 美 二あ、左様か。鮎美 美 二連作でない以上、前の句と關聯するのは、おかしい。亞鈍氏の再考を望む。お五ひはよい意味のジキルとハイドである。新進の益々精進を望む。

豆 秋 二それでは灯が点きましたので(停電中であつた)句評を初めて頂きませう。鮎美さんの句に「ますい」〜と亭主みんな喰べ〜と言ふのがありますが、奥さんの手料理も時には不味いと思ふことがあつても口先ではうまい〜と言つてばかり喰つてもらうよりは、たまには素直に不味いと言つてもらつた方が氣持がよい。只ますい〜と言はれながらも、皆んな喰べてくれると言ふ愛情だけで満足だろ〜と思ひます。と言ふ様な意味で今席の句評は良い句ばかりでなく、この作家としては不味いなあと思はれるやうな不味い句にも箸をつけて頂きたいと存じます。それが

はどなたか.....。亞鈍 純 二それでは豆秋さんの述べられた今日の座談会の趣旨により、勇氣を出して一句提出しますが、九月号の金沢の久留美さんの句、右砂糖左は鹽の中に生く(久留美)この句なんですネ、右を砂糖に持つて行き左を塩とする処に様々な句意が浮んで來るんですが、先に司會者が言はれた様に句として、句の表現として決して巧みであるとは言へなく、むしろ不味い句ぢやないのぢやないかと思ふんです。右は六甲道、左は有馬道と言つた様な標識塔の様な感じがないでもありませんが、さすがに永年川柳を作つてゐられる久留美先輩だけあつて下五の中に生くと、中に生くからうじて川柳として拾ひ上げてゐる様に思はれるんです。其処でなんです、僕は世間の世渡りしてゆくうちに甘い、からい生活があり、甘い生活は自然的、妥協的、その場的、日和見的であり、からい生活は不自然的、非妥協的、一貫的、絶對的、な生き方の様に解釈されて、そのうちでも僕の直感から受けた感じは砂糖は右翼的、塩は左翼的、それ等の思想の中に生くと解釈して今一度讀み直して見れば句意全体が川柳としての役割を一應果してゐると考へるんですが皆さん何うでせうか。

亞 鈍||はあ、僕とは全然解釈が違ふんだ。砂糖と塩の中、中間……。

路 郎||これは砂糖と塩の中間ではなく、塩の中に生きてゐるんだ。

亞 鈍||僕は中間に生くと考へてゐたから、前の句と関係するんだ。だから右は六甲道、左は有馬道と言つたんだ。その中間に迷つてゐる……。

路 郎||右も自分、左も自分なんだ。

鮎 美||右は過去、過去の享樂時代ですな、左は現在……。

亞 鈍||それちや右と左は從の線ちやないですか、僕は横の線に見てゐたんだ。右翼と左翼との中間に迷う……從の線なら上砂糖と言へば、んだ。さう言う意味ならこの句は全然失敗だ。

路 郎||野介君の句評に盡きてゐる。

豆 秋||又停電でロソックの灯になりましたが先輩の句が眞先に組上に上りましたが、次は「川柳塔」又は「近作柳樽」の中から一つピツクアツプして頂きます。

もみくちやにされてもうれしすきな人 (夢裡)

鮎 美||この眞実に生きてゆけるこそ本当の人世ですネ。垢抜けのした表現、誰にも解るゆき方、シューツと音

して一直線に空へ上つてパツと開いた花火のやうな、純情さ、世の中はこんなに涼しいものだらうか、好きな人にかれば、他愛もないものです。「もみくちやに」と言う上五の意味は廣い。色々にとれる。がそれ丈にナイスである。

路 郎||君は時々みよふやうな英語を使うが(笑声)ナイスとは？

鮎 美||綺麗、美しい、句が奇麗と言う意味です。

路 郎||そんなら綺麗と言うたら一寸意味が違ふぢやないか。綺麗とか、美しいとか言うのも英語で色んな言ひ方があるからネ、讀む人によつて違つた意味に取つたら君の言う意味と違つて來るだらう。

梨 里||鮎美さんのおつしやるのは今の流行語のナイスと言う意味なんせう。

梨 里||粹などか、すつきりして、結局垢抜けしてゐるつて言う意味ぢやないんですか？

亞 鈍||ナイスでい、ぢやないですか。

野 介||清潔で可愛い句だと思ひます。それ以上、如何でせうか？こつやう風な感情は度々詠み古されたのぢやないでせうか。

亞 鈍||清潔で可愛い句とはね。野介もね、あまりにも卒業しすぎてゐる様な言ひ草だ。そしてこつやうな感情は詠み古されてゐると言う意味は末摘花に持つて來てゐるのかネ。

野 介||末摘花ばかりぢやありません。末摘花だこれ程清潔な感じを受ける句は少いでしようね。やはり現代の川柳だと思ひます。

亞 鈍||僕はさう言つた様なエロ的な川柳と考へずに讀んでみただけに鮎美さんの上五の「もみくちや」に色んな意味があると、言ひ込みが納得出來ずして、この句を綺麗とかナイスとか、可愛いとか、言つた事がどうにも飲み込めなくて好きな人の下五を、綺麗とか可愛いとか限定した言葉で結ぶなればこの句は解つても全然先の兩氏の言つた句全体がそんなに綺麗とか、ナイスとか、可愛いとか言う句として、とれないのは僕の川柳

的な觀識の足りないせいだらうか。

路 郎||この句で上五「もみくちやに」の語から末摘花式に解釈してゐるのは曲解である。もみくちや云々は結局商賣人の女の手練手管と言うか、愛してゐるやうでもあり、愛してゐないやうでもあり。そして物質的にせしめられる。それをうすく感じないでもないが、やはり嫌ひにはなれないと言ふ執拗に絡まつて行く処を詠んだ句であると思ふ。

鮎 美||「好きな人」この下五が命です。そんな人になつたことは私にはない。或は先方では好きな人であつたかも知れないが此方には通じてゐないので覚えはない。私の好きな人、それは(英語使つたらまた叱られるかも知らんけど)生、かめしめる(か)知らんげ(か)先生、それはワイフ位です。私の句に「マイシンでたすかる好きな人の声」原句に負けますけどね。

亞 鈍||先生の句意が一番妥當ぢやないんですか。僕は好きな人は女だと思つたんだ。

路 郎||さうだ。もみくちやにされる方が男なんだ。六十位になるともみくちやにされる場合の方が多いいのだ。女は年増だね、惚れて通へば千里も一里だ(笑声)

豆 秋||それでは次にうつりませうか。

野 介||前にいらつしやるのでこの句を取り上げるのは一寸氣が引けるのですが、やはり良いと思つた句だから提出さして頂きます。

しまひ風呂善人の首一つ浮き (鮎美)

この句の善人の首と言う中七が、ズバツとその場所に坐つておつてや、作者の主張、或は主觀を露骨に出しながら客觀句として成功して居るやうに思ひます。しまひ風呂に入つてゐる人は全部必ずしも善人でない。中には泥棒もスリも居るかも知れない。然し仕舞風呂のたゞ眞中にポカンとして風呂屋の屋根を見てゐるときは一樣に善人に見えるらしいからわかちたい。そのギヤグヤするどく突いたのが、この句の句意ではないかと思ふ。鮎美氏がこつした現実の姿をさらへて、その底に繪ての人が氣付かず、然も繪て

の人の氣付かず、然も繪て

人が言つてもらへば解るやうな句意をキヤツチされたのは鮎美氏の一つの。

鮎 美 柳魂か？ (笑声)

野 介 鮎美氏の一つの新しい意図として取上げさせてもらつていゝと思ふ。……鮎美さん作句動機は？

鮎 美 鮎美氏の作句動機を聞く前に一寸一言、言はしてもらいませう。言うことは簡単なんです。それだけ僕の考へ方も單純なんです。

路 郎 言うことは簡單か知らんがえらい前置きが長いなあ (笑声)

鮎 美 鮎美吊上げやな。

亞 純 僕曰ク (笑声) 野介のこの句に対する批評が勝ち過ぎてゐる。鮎美は泥棒やスリと一緒に仕舞風呂に入つてゐると思はなければ、仕舞風呂は悪人と善人と一緒に裸になるものとは考へられない。一般の風呂屋では全部が裸である限りは明るうちに入つても暗いうちに入つてもそんなけじめは全然つかないものなんだ。と考へた場合仕舞風呂に入つて大井を見ただけで善人であるとか考へる野介の一般的批評は兎も角も僕は鮎美自身の善人を此処で言つてしまつてゐるだけに鼻持ちならないんだ。

豆 秋 銭湯も土地柄によつて変りますが僕の近郊の銭湯なんかの仕舞風呂は野介さん

の言つたやうに大抵チボか泥棒かです。

鮎 美 柳魂か？

豆 秋 いやおカマは朝入りの善人と言ふのは鮎美さん自身のことだと思ひます。

路 郎 勿論さうだ。どちらかと言ふと先刻からの批評で枝葉のことを喋りすぎてゐないかと思ふ。この句は勿論作者自身が一日の仕事を終へ仕舞風呂へ入つたときの心境を「善人の首一つ浮き」と詠んだものである。

鮎 美 句会が幾日も続いて實際風呂に入らう入らうと思つても、その機会を逸するんです。

豆 秋 それば釣りの方や (笑声)

鮎 美 いやね、たまに早く帰れば、疲れてゐたりして今日こそ、明日こそと思つても中々行けないんですよ。今日こそ入らねばと思つて飲みた

いお酒も飲まずにね。仕舞風呂で誰も居ないんですよ。ポカシとして、これから帰つて飲めるなありと一寸したゆとりを抱いて明日への希望を持つてゐる。私は善人かどうかは知らんが、川柳道に対しては善人であると言ふ自信を持つてゐます。

亞 純 川柳に対して善人であると言ふことはすべてに善人でなければならん。

鮎 美 まあ総てに言うことはねえ……言ひ切れまへんなあ、然し総てに善人であるやうに努力はしつゝありまつせ。

豆 秋 それでは「近作柳樽」でも一句お出し願へませんか。

野 介 豆秋さん提出して下さい。

豆 秋 それでは「近作柳樽」の自由朗さんの句で、

川だけは賣れず故郷え残し (自由朗)

野 介 古郷を去る時の句を想像されますが、さうした場合に伴う感傷がなく、これだけをズバリと突き出した処にこの句の魅力があると思ふ。これがメン／＼とした感傷されたものなれば恐らく鼻持ちならぬものになつてしまふ。その感傷を内らに、しまひ込んでこともなげにこの表現を取つた処に返つて感銘させる処があるのではないかと思ふ。

路 郎 適評であると思う。自由朗君は元松竹家庭劇の作者であつたが戦争中鉢山の経営者になり轉じて精粉業の経営者になり、今度は古郷を捨て、菓子屋の社長になると言ふ環境も轉々として変るが、その心境は何時も喜劇作者を脱してゐない処に面白いと思ふ。「社長邸市営住宅十二號」

「自家用車チエンが切れたり外れたり」の如き正に喜劇の主人公である。

鮎 美 先生、自由朗さんに川雜川柳座の喜劇一幕の脚色をしてもらひたいものです。

路 郎 喜劇書くように言うてあるよ。

亞 純 自由朗氏とは僕も面識があり、その漫筆、殊に「川柳雜誌」に寄稿されておる大阪井の会話の遣り取りには、松竹家庭劇の脚本以上に興味深く読ましてもらつて居りますが、川柳の場合、僕も豆秋氏が提出された「川だけは」の句には、あらかじめチエツクして置いたのですがこんな眞面目な句はないと思つた。成程川柳にはユーモアとか揶揄とか言う條件も具備されて

ゐるでせうが、それを川柳の要素として兎に角弄び過ぎる作者が居るやうに思はれてその不眞面目さに僕は何時も、ヒンシュクを買ひてゐるのですが、それを職業としてゐる自由朗をしてこの句は野介氏の、

野 介 初めて氏をつけてもらつた (笑声)

亞 純 野介氏の言はれる感傷さ (川柳の場合では意識的なユーモア、揶揄) を排したオーソドックスな立場で眞面目に詠はれた自由朗氏の川柳的態度を僕は改めて学びたい。

豆 秋 人世の泣き笑ひをエグつてますね。あゝまた灯が消えた。それでは時間も遅いのでこれ位で、皆さん御苦勞さん。 (梨里筆記)

飛 燕 往 來 (其一)

築山快夢起氏 (ホノルル市) 路郎宛

丁度此家から朝夕山を眺めては興趣に耽つてゐる感ひをそつくり詠んで下すつたと思ひました。詩作と遐想には持つてこいの場所ですが、移轉勿々多事多忙、てんでそな氣持は起り所もあらずせん只今はカイムキの家から持ち込んだ植木や花もの、友人から貰つてきたものを、何処へごんな風に植えて、地ならしは、庭の設計はと、小開拓者の様な氣分です。一寸人様から庭らしく見へるのは恐らく一年位かゝるでせう。(後略)



詠史川柳

につぼん (12)

戸田 古方

近代社會(1) (十九世紀)

(一) 遷都

新しい酒は新しい皮囊にという言葉の如く一〇〇〇年の京都は新時代には古すぎた。一時大阪への議もあつたがやはり江戸幕府の旧本陣こそというわけで江戸へ遷る。

お天子の衣の裾がみえただけ官員が靴ならしめる下郎部屋江戸前を大膽職は呼びつける

(二) 富國強兵

蓋をあけてみたら驚くべき西欧先進國の發展にどこにかく追従せねばならないので國策は立ちどころに富國強兵となつたわけだが、この蛙は生憎井戸の中から出たばかりで戸惑ひすることおびたらしい。研究をすれば百姓兵強しサールベルの方がごつやら斬れそう

(三) 藩閥

徳川閥はなくなつたがそれにかわるは薩長土肥の藩閥政府、薩長幕府ともい兼ねない。長の陸軍、薩の海軍は永く明治史にそのあとをのこす。

二人扶持の昔のことは忘れはて薩摩奔通用しよがしよまいが長州といえはいつもの大座敷「よまこい」は御前に教えてもろたのよ。

(四) 士族

譜代、旗本、御家人はじめ多くの藩士はその処を得ずして路頭に迷う。士族の商法に終つたみじめな人が如何に多かつたことか。巡查や軍人になつたのは上の部。西郷の在韓論もそれに深い関係がある。

この類でありついでいる遷卒れざりて又一喝をしてしまいい矢舻が似合う娘でたかられる

(五) 文明開化

ちよんまげを取るは、刀はとるは、一日おくれたら人間でないようにいわれて皆格好だけ西洋を真似しはじめた。実際に少しやりすぎておくれでいたんだから無理もない。開蒸氣まだまだもつと見るつも

(六) 官業

「學問のすゝめ」に残る紙魚のあと金を持つていた町人は大名

貸してほとんどへこたれた上に、海のものとも山のものともわからぬことに金を出そうとしない。政府は税金で産業のモデルを人民に見せなければならなかつた。それが官業模範工場で、どうせそるばんに合わぬ仕事だから後民間に漸時拂下げられる。

通訳もなしにお儲け指導する青い眼にその器用さがうらやま

(七) 民権運動

フランス革命の天賦人權の思想はいち早くひろがり、西南役以後はもつぱら言論をもつて戦うのだが、少々血も流れた。政府は集会禁令や保安條令でこの民間の声に対処する。

血刀の魅力いまだに消えさらす自由は死せず慾望も又死せず

(八) 歐化と互動

鹿鳴館は西洋人に日本の文明の程度を見せるためのものだつたそうだが、今日から見れば全く噴飯ものである。はたして歐化のあとにはフェノローサあたりを教えられて國粹主義の時代があらわれた。

逆輸入して浮世絵が見直されちちれ毛へ娘としての備みよ

(九) 市場

資本主義には原料の獲得と市場の確保が必要である。日本の購買力をさへえる農民はまだ完全に解放されない水呑の状態である。國內市場に

見込がないので勢い帝國主義侵略主義にならざるを得ない釜山にはいつの程にか日本町軍人へ財閥として耳打ちし

(十) メキシコ弗

安政の開國によつて金銀交換の比率の有利な日本の金はぐんぐん海外に流出してゆき、物價騰貴、紙幣の發行ぐらいでは追つかない。金本位制に出来るまでの財務当局の苦勞はなみなみでない。贋造も交つて金にかえられる鏡莊の小輩抜け日なくみつつけ

BK放送川柳

「失業」

須崎 豆秋選

入選

失業はなんと切ない午前九時 貝塚 南北

失業にもう蠅が啼くベンチ 東京 紅 秋

失業を知らず子供らいつてらつしやい 大阪 亘

失業にいらぬ美髯となりけり 大阪 貴山

失業はしたと釣竿拭いている 神戸 句沙彌

佳作 失業への煙突も生きている 千葉 一二三

失業を動物園で子と忘れ 兵庫 齊花

失業をして見直した妻の位置 岡山 十九平

失業へ今日ももつたいない天気 神戸 初之助

失業は承知性格まげられず 大阪 黒天子

失業をしたのを母にやつと云う 京都 貞子

失業の眼にボスターは山や海 大阪 邦夫

失業へ過去があまりに立派過ぎ 大阪 灰 兒

食うぐらい犬でもと失業励まされ 兵庫 自由朗

失業の身にもつかない酒招ばれ 大阪 與三郎

院長 牟田 哲三郎 (哲)

大阪市南区長堀橋交又点西・電話船場五〇〇〇番

耳鼻咽喉科 牟田病院



平塚市 木村 孤浪

親といふ権柄づくのまゝ殺られ
高級車牛落付いて五台とめ

交通も牛車過ぎるを待つて吹き
無智の美を或る夜場末に発見し

大阪市 武部 香林
値上々々さて代議士の声もせず
健康で之だけ休めたらとおもひ

下駄箱へ靴を置いて兒が抱かれ
鹿寄せのやうに集る紙芝居

横浜市 福田 山雨楼
不治を宣告さる(二句)

いつそよくしやべる日があり妻笑う
仰向いて照る日曇る日あばら骨
押入のついでに拭きたかつた肺
晝寝などして神経の太い老婆
丸かぶりトマトから血の滴るや

國鉄退職

池田市 戸田 古方
家の前うるさいほどに汽車通る

湯の町の道笹の葉が窓にすれ
子の興味小さいちがい見逃さず

ホノルル 内藤 草一郎
金づまり枕を替へて寝ても見る

ちこ握手位ゆるせと老いらくの
流れ〜て場末のバーのクエンです
事々に最初の奴とくらべられ
誤り後妻主婦として向かず
天二物與へりや家庭争議する
時折は夫の年を淋しがり

尼ヶ崎 水谷 鮎美

しらさぎより
恋文を書くボールペン滑りすぎ
街角の人氣サンドイツチマン唯歩く

大阪府 西尾 栗

新婚は素直にお膳の蠅の番をする
PTAせむしのやうに椅子にかけ
民主主義上着は下座から脱ぎ初め

大牟田市 高田 抱逸

祇園祭オールアップの妓にみこれ
一人息子が十二も上の後家と落ち
併列の電話で馬鹿な打合せ
どうせ山だ富士の雪だけ見て泊り

布哇 市岡 曉舟

ラナイ島鳳梨ストライキ
アレアレアレ式阡万弗腐り出し
旧友の五年であてゝ日本行き
高くともジャバンシルクの肌触はり

佐賀縣 松野 えい

五百さんのニツクネームで惹がなく
職歴へ円満退社続くなり
競輪へ隣り同志が負けて来た

大阪市 市場 汲食子

風呂代もたいてやないこの家族
夜店に灯つかぬうちから子が出掛け
齢五十貧乏神にまだつかれ

名古屋 吉田 水車

やせ世帯十一貫にさゝえられ
メロンの値と我が月給を比らべて見
消防車おもしろ相に見えもして
俄雨迎えの妻のうす化粧
ジョッキ四ツか弱き腕に運ばれる

おのろけもおはこも聞いてあくびが出
お土産はフンドシ一つアナタハン
必勝の信念悲しアナタハン

大阪府 須崎 豆秋
ベカコしたやうな顔だが流行つ妓
橋墜ちたまゝなり予算無いとかで
けなげにもふんどしだけは白かつた
啄木でなければヂツと手を見るよ
長生きをしなければと匙投げられる

アナタハン島の白旗

大阪府 竹内 潮花
食満さんに嫁ぎどなたを見返す氣
稽古屋の夏は火鉢を置たまゝ
氣の毒なほどの日傘で逢ひに来た
夏やせへ妻のみ肥えるのも淋し
色男にされて四十の顔をそり

大阪府 北川 春巢
兄弟で稼ぎ貧乏寄せ付けず
半ズボン男はとくやなと云われ
アベツクで来た日は松のランチにし
貰いものなり羊羹を厚く切り

奈良縣 尾崎 方正

毛で突いたほどの傷にも診断書
梅雨晴れへ大人も観てる紙芝居
アロハ襯衣涼う着てる無職なり
借り傘を忘れるほどの長話

奈良縣 尾崎 方正

借り傘を忘れるほどの長話



愛嬌も人妻としてひかへ勝ち
 八代市 佐野ト占

拳骨で殴りその手で撫でられる
 大和市 清水白柳子

言ふことがないとおかずにけちをつけ
 大和市 霧深しホームシツクになる病床

備促がないので敷居高くなり
 そうでしたなあと八月十五日
 弟に澁々貸せばそれつきり

夢多きを阿呆とや言はん昨日今日
 姫路市 夷 一笑

精力のおとろえを知るせまい蚊帳
 まゝごとの立ちのきさせて水を打ち
 大和市 木下幽王

汗洗濯汗洗濯八月の歴史
 経済学原理の通り破産する
 敵に廻ればうるさい奴も抱へごとく

もう一度アツと云はせたいなど思ひ
 怖かつた梅雨の出水を京訛
 鳥取市 中島鉄洲

ページ解除酔えばきびしい御發言
 大阪市 水谷竹莊

別れる氣浮氣した事打明ける
 い、仲になれと世話したわけでなし
 恋人もなく居残りを引受ける

言ひ過ぎた淋しさ女一人寝る
 どう嘘をついたものかと終電車
 ようお考へやすと女將に意見され

爪はじきされる覚悟で金を貯め
 下関市 弘津柳慶

酷暑まづ所長からひめい上げ

人生に似てはてしなき鉄路線
 陰口を云はれながらも膝をまげ
 役得の客を送つて呑み直し
 兵庫縣 小沢史葉

霧深しホームシツクになる病床
 姿態に背たゝかれた旭町
 高架線下にトマトの葉がゆれる
 九州旅行

旅愁〜阿蘇の煙につき当り
 橋筋で合ふ先生の赤い靴
 商魂火と燃え脱税を考へる
 ゴミ箱へ酔ひつぶれてた法善寺

苦心慘胆した書類に盲判
 兵庫縣 小西無鬼

ハイヒールいと恐わ〜な歩き振り
 二号さんが氣樂でよいと言ふ娘
 一日の病氣に彼女見舞に來
 今日のうちじく孫の分だけしか熟れず

電力値上げいよいよ爪に灯さんか
 下駄箱で防毒マスクへしやげてた
 あべこべに患者に病名おしえられ
 夜更しにパチンコます〜腕がさえ

夜更しに相手のサーピス輪をかける
 觀世流隣りのジャズをうるさがり
 人情の冷たき家の白い壁
 未だ父に頼る心を叱つとき

眞四角に座るは母の身嗜み

うれしくも心の屎叩かれる
 大阪はよろしおまんなにぎりすし
 停年になつても退職めるといはぬなり
 虹が出た！四十になつても夢をもち

何でもよい貰ふて置けと五六枚
 無言の抗議落疾を繰り返し
 附添の方は肥満をもて余し
 汗のシャツ皮を剥ぐよにして脱がせ

洋食も蠅は一向ためらわや
 箸とつて見れば派手な皿の柄
 あばら家もあまさず入れて虹の橋
 大阪市 竹田蘆穂

經過が良くて看護婦嫌がらせ
 温泉の街の夕暮年は忘れたし
 釣れぬ日の豪傑笑らい元閣下
 世の中は廣し宝石賣れて行く

惜しい句が紙屑籠にもみあたらず
 まつくらにしてもやつぱり暑おます
 粉だらけの子も交つてる花火なり
 飯つぶをまいて花火へ子は走り

生活は安定母と子とひるね
 せめてもの奢り子供とのるタクシー
 頼らない主人で女世帯じみ
 無作法と知つて寝轉ぶ間柄

再婚をする氣になれば云ふて來ず
 大阪市 松江梅里

大阪府 種瓜平
 大阪府 渡辺孫拙
 大阪府 富岡淡舟
 大阪府 太田良子

大阪府 水谷竹莊
 大阪府 種瓜平
 大阪府 渡辺孫拙
 大阪府 富岡淡舟
 大阪府 太田良子



べんちやらをまともに開けるいゝ身分

岡山縣 丸山弓削平

動搖を隠す言葉を荒くする

事を待ち望んで女つゝましく

就職を頼む應接間に圧され

岡山縣 直原七面山

鼻かんで頼まれ事を思ひ出し

諦めて呉れど卑怯な男なり

握り返されて男安心し

洋裁と二つの恋に忙しく

プランではキツスが出来る筈だった

ヌード撮るのど彼女少しも慌てない

未亡人の恋妹に知らせとき

服は服靴は靴にと身を任せ

糸屑を取る仕事さへ妻らしゆう

練習をして来た様に囁けず

好きな癖に女ソツポを向いて掛け

社務多忙妻に淋しい日が続き

岡山縣 黒田笑泉

花嫁のかつらが歪む急停車

無愛想な顔で出て来るこの暑さ

税務署へ口八丁の妻をやり

宇都市 上林粗影

人手に渡れば惜しい株蘇鉄

されど君茶碗の音の親しさよ

蛇莓此処で悲劇のあつた跡

父親の使ひ蚊柱突走り

鳥取市 河村日満子

飲んでさへ意見の合はぬ君と僕

紙切つて見せて鉢の包まれる

螢狩り我が住む里の子等の幸

梅雨霽れに太陽怒れる如く照る

長生きをせえと叔父にも見離され

腹割つて言へば僕かて嫌なんだ

運がいゝ方やどおもふ猪口を持ち

ではかはります電話から母の声

兵庫縣 田代尋四

腹の立つ買溜の服地穴だらけ

恋すれば六十路なか／＼盛んなり

燈台の旗日きつちり旗を出し

鮎釣り時にあぶない線も越え

傘持つて来ても主人を呼びそびれ

失恋をあけすけ話す年になり

禿げぐあい人どくらべて氣をよくし

浪子程わらびを取つて帰りけり

座談会アリバイにする発言し

つばくろへ留守にする戸を少し開け

アベックに涼しいベンチ皆どられ

母の日の母へすまない豊繁期

燈台の春へ舞い込む年賀狀

岡山市 藤本満年

形勢を見て嫌天下の家を辞し

キャンデーの箸は汚いように捨て

先輩の叱る齒切れの心地よし

外科病めば内科の医者が見舞に来

お見舞の菓子をお次の客へ出し

熊本縣 西口如川

末席へどうにもならぬ自尊心

停電の咄嗟女給に異変あり

里帰り甘い涙が堰を切り

岡山縣 福島鉄兒

無茶苦茶に妓が欲しい夜なりき

軍配は母に上つた聞き違ひ

閣下の娘世が世であればなと思ひ

うしろから引いてるがなと教へられ

燈台が見えて母國の夜が白み

岡山縣 直原湖月

ネオンの灯遠く眺めて金を貯め

チンドン屋五十にしては若く見え

西郷隆盛の様な女の内氣さよ

父病めば子供は医者眞似をする

伽話を忘れた頃に子が産れ

岡山縣 黒田久米女

アベックの手の組み様もあちら型

魚釣へ話しかければ向きを変へ

岡山市 藤本茶々

白にもいろ／＼色のある干場

アルバイト出来る程アルバイトから買わされ

氣位もどう／＼下げた裸なり

おかすの相談されて八百屋ちと困り

こゝまで焼けたと説明まだ続け

ビールでも飲んで見ようと女連れ

兵庫縣 榎南夏六

寄附金の高で誠意を計られる

欠勤をしてパチンコでもうける氣

大阪市 西いわを

御苦労と云へる立場で暮したい

大阪へ住んで氷の旗を上げ

岡山縣 高山朗笑

顯微鏡こゝにも小さき世界あり

サンドウイツチマン人間性を滅却し

ハトポツポ喧嘩の中に戻りたり

岡山縣 横部牛歩

当選へ敵もお世辞を云ひに来る

お互になどとどちらも禿であり



蔑みの笑いと嘔は知つてゐる
うちの子を叱るボリスの子も裸
当主まだ家宝の質を信じない

岡山縣 服部十九平

入墨が兎角裸になりたがり

失態が笑はぬ男にして丁ひ

肝心の一字が消えてゐるネオン

血圧の話で局長会議すみ

泣き寝入りして処女性を疑はれ

岡山縣 大森娛句樂

返杯の貸しがあるまゝ会は閉じ

又廊下へ足跡がつく夏休み

親しさを分つに絞るビール瓶

西宮市 田辺由布

親切な税吏産制までおしえ

パムの乳うき名流したころ思う

京の大文字

大文字ゆかたが似合ふ二人づれ

熊本縣 成瀬月仙

嫁となり風呂は一番ビリとなり

山の滝誰が捨てたかビール瓶

阿蘇山の煙くづれぬまゝ動き

芦屋市 若林草右

新しい藝を覚えた孫を見せ

事故現場子守かたての人が寄り

大阪市 足立春雄

先生は知りませんとは言へぬらし

一應はアメリカではと講師言ひ

大牟田 中村五醉

藝妓からの電話社長の声でなし

俺に出来る孝行母の肩をもむ

眞剣な腫へ安定所は疲れ

一人位欲しいと妻は墮ろさぬ氣
腹の虫殺して花を持たしどき
雷鳴の切れ間時計の音が生き

熊本縣 有働芳仙

それ位の浮氣だまつている家名

死ねばよいと云う妻の腫をふと感じ

再婚の話こうまで世帯じみ

岡山市 延永忠美

愚妻など云つて尻にしかれてい

車中から見の僕の家小さ過ぎ

下関市 石川侃流

馴染まない子へ継母の淋し過ぎ

氣に入らぬ浴衣は暑いものにされ

結婚をしてから飛べぬ溝の幅

岡山縣 大森苑女

白靴でなければ行けぬ様に云い

座ぶとんをまくらにころぶ旅づかれ

呉服屋に電話をかける世に戻り

大阪市 南捨舟

背に腹のああ校長の偽証罪

横綱を倒した汗が写される

廣島縣 山田季贊

プランでは貯金背廣が出来る月

貸ボート打明ける氣で沖へこぎ

鉛筆をけつり直して事務がひま

盆踊り大阪弁の娘も踊り

夏期手当呑んだ金には追ツつかず

大阪府 水本無人

空腹に心ならずも子を叱り

蚊を追ふて若い二人の仰山な

岡山縣 水田草骨

ねだる時少女はかくも多藝かや

新築をしたも隣の氣に入らず
堂々と寝る父をつとねむる母

玉野市 中村ただみ

老いらくの唇にストロー細すぎる

小便の繕くなるほど稼いでも

小器用にコントなど書き貧乏し

大阪市 山本葉光

毒だから食わぬと死病とも知らず

小理箱を云ふなさあ飲めもつと飲め

世辞云へば笑つて女もお世辞言ふ

アベツクとアベツク又もすれ違ひ

釣れ過ぎて風光明媚忘れかけ
大阪市 東喜久堂

おちよくつたように小猿は尻を搔き

虫籠を軒に女の二階借

かすがいも利かず結極離縁沙汰

★正 誤前号「川柳塔」八頁十行目の「せめても
の奢り子供とのタクシー」は森下愛論の作

★廿五頁三段十二行目の作者鬮骨は変骨の誤り

★前々号(二九一)十一頁二段二行目、下山と

あるは野涉の誤りにつき訂正する。



タケタ

たっぷり

愛嬌たっぷり

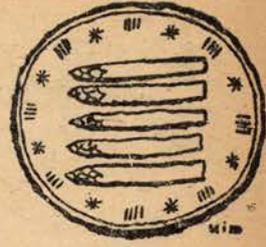
B1 たっぷり



疲労と脚氣に

強力メタボリン

錠・注・無痛注



作家論

黒本芳泉

福田山雨樓

芳泉君は戦後派ではないが二十四年頃から近作柳樽欄でめきめきと頭角を表わし

エロに無れグロに無れ酒面白しお、君も日曜文士開業か

夜だけはその賢婦ぶり止めて欲し

サーピスの唇痛い程吸はれ

駢落を半ばおどして承知させ

などの佳吟を吐き再三再四巻頭を切つてその健吟振りを見せている。まことに頼母しい好作家である。

作家には故六厘坊のような若き天才も少くない。そして天才の生涯は実に華々しいものがある。これに比して大器晩成型は始めあまり冴えないが、年期を入れるに従つて段段とその光芽を現わし、手堅い作品を生むようになるのである。

思い起せば昭和九年九月九日、廣島縣竹原町に川雜支部が創立されるので、自分は紳樂、翠夢両兄と共にその句会に大阪から馳せ参じたのであつた。竹原は瀬戸内海に臨み

海を距てて四國の川柳王國今治に近いので、英賀夫、心府、曉童の諸兄も相見え盛会であつた。幹事は町田承春兄であつたが芳泉君も熱心な一員として加わり、記念撮影にもその剽悍な風彩を残している。と云つて自分には別段印象に残つておらず、同君の性質等一切不明であるが、その写真と云いその後昭和十四年三月尾道で開かれた西日本鉄道川柳大会(この時は路郎先生が出席された)の記念撮影を見ても、小柄ながら何処となくしに毅然とした風格がしのばれ、元氣に満ちた凛々しい青年であつた。

竹原支部創立後芳泉君は近作柳樽に、各地柳壇に投句を続けている。があまり出色な句が少く、

錢別の札状が来てそれつきり話しかけても返事せぬ妻泣いてゐた

只押しの一手に自己を信じきり改めて御返事すると逃げる氣か貧乏が女房らしくしてしまひ

などの佳吟に僅かに將來雄飛の片鱗を見せているに過ぎなかつた。それから戦後まで実に永い作家的トンネルを経て來たのである。

竹原は彼の俊傑頼山陽を生んだ所、夙に文教の町として有名であり、幾多の偉材を輩出している。文運に恵まれた要衝である。即ち環境に秀で郷閩の先駆として重き土地柄、自然川柳家にも多士濟々の観を呈している。承春兄はその後愛媛縣に去つたけれども、可笑、芳郎、斗秀、みづほ、愛鳩、和郎、富穂、賀清、桃林の諸兄健在であり、戦後後は柳慶、葉留路両兄の移り住むあり頃に活況を呈したのである。支部句会も断続としてしかも怠らず各地柳壇を賑わわしているが、その間にあつて芳泉君は唯の一回も句会を外していない熱心さである。

軒に來る雀に朝寝観かれる
争議解決スキツチを入れた音
薬新持つた子供は笑はない
など句会吟での秀逸であ

る。が、何と云つても長いトンネル時代の続いた戦後迄のスランブは覆われない。これは川雜と云う最善の舞台があり、路郎先生と云う最高の選者のあつたチャンスを、有効に利用せず体当りをしなかつた罪に歸するものと云えよう。他に何等かの複雑した原因が伏在していたのかも知れぬが、表面的には右の逸脱が惜しまれてならない。

けれども戦後における同君の活躍を見ると、トンネル時代の低い起伏を通じて芳泉君が如何に磨き、如何に苦んだが察せられるのである。スランブを脱した作家の成長、その事が非常に尊いのである。

ところで芳泉君の句には生活の匂いが殆んど出ていない。勤労の場から生れた句も少い。戦後の多くの句の中から次のような多少日常生活を反映した作品を拾い出すには骨が折れる程だ。

銀飯の訳はあなたの誕生日
腹の立つ手紙どこから書いたる
養生の爲の晝寝と云つて置、
無雜作に束れて母は老ひたまい
金のあるうちに死にたいと思
ひ

そして女性を詠んだ句が過半を占めている。このことについてではあとで述べるが、生活から離れた句が多くて直接

生活に触れた句が少いと云うことは、神経質な論者が云うように切実感が欠けたり迫力が不足する結果とは必ずしもならない。われわれの生活と云うものは自己を中心として、大きな円を描いているのであつて、その円の中には日常衣食住の問題もあれば、精神的な苦惱もあり、また生活体験を超えた美しい夢もある。自己の中の社会、自己の中の他人を批判する知性、自己の感覚を刺戟するあらゆるイメージも渦を巻いているのであつて、川柳作家としてその中のどれを選ぶかは全く自由である。偏ることもあろうし万遍なくいろいろの事象を促せる場合もあるのである。それでよいのである。要はおかしの詩情を最大限に發揮すればよいのである。取材の範囲が狭くとも内容、表現共に深い場合もあるし、その逆の場合もあるであろう。だから芳泉君の句に日常茶飯、身辺雑事の色彩が少かつたとしても何等とがむべきではないし、反対に女性觀察の句が多かつたとしてもそれが直ちに手柄になると云うわけのものではないのだ。

それでそろそろ本論に入つて芳泉君の得意な句に鋒先を向けて見よう。

寝煙草の女の指の偽ダイヤ

愛されて居れば女は太平な鏡台へほこりを溜めて無事な後家
チンドン屋今日は女房の纏袴で出
捨てられてからの女の行状記

など一連の客観句には人生批判のひらめきがかがわれないがその観察態度に信頼が持てる。
二号でもいゝとは女哀れなり
自惚れの女男を不幸にし
配給で貰った様な女房と居
男夢女現に生きたがり
倦怠期なごととセイタクラしく云ふ

などには作者の主観が相当強く盛られている。しかしその観点は必ずしも高いとは云われぬようである。独断に陥り易いのは主観句の常である。

作者は肉休川柳にもその鋭い視野を放っている。
饒舌さキスするひまもなかりけり

キス位ならと女に隙があり

口惜しさ肉休テストまでされて首を抱く露はな腕の蛇に似て

四十の恋肉休の夢ばかり

これらの句には遺憾ながら安易なものも付き纏つていゝ。その点次の句には個性が滲みはげしい、きびしい氣魄に打たれるものがあり、芳泉君の眞骨頂を示しているように思う。

寝に帯るだけの夫にすねてみる
密会のスリルを女忘れかれ
正直に云つて欲しいと惚れてある

札束を女一度はたたきつけ
あきらめと悔と女にされた後

肉休川柳については昨年五月号の本誌で座談会に取上げ

徳島の旅より
松山前田伍健

うれしさを振りまくように阿波踊

おどり唄旅の浮氣をそゝり立て

厳肅と云う笑いあり老首相

いざごきは蝸角蟻斧の事でした

近く嫁く娘え叱りよう教えよう

老人の日え老人の見得があり

金沢安川久留美

考へても女の想は小粒なれ

新芋は葉巻のやうに客を待つ

東京富士野鞍馬

嫁きおくれと云う日本語も忘れられ

父のいうのは先々代仁左衛門

オフィスで見る駅長は禿げている

隣の猫産んだとみえて痩せてくる

られたし、本年三月号にも路

郎先生が「窓口」のでべてい

られる。が、自分はこれにつ

いて最近積極的な意見に傾い

ている。もつともつと肉休川

柳盛んなるべしと云うのであ

を表白する。自分はその川柳家の眼に期待したのである。

昭和二十四年十月号の國語

と國文学で千葉治氏は「誹風

末摘花の成立」と題し研究を

発表された中で「末摘花は單

なる晦澁の書ではない」と喝

破されたが同感である。川柳

好士は末摘花を再認識する必

要がある。同時に昭和の末摘

花が出てよいと思う。勿論

発表には伏字を用いる要があ

ろう。が親しい内輪の間柄で

はしようへきを取除いて談笑

すればよい。眞面目に取扱う

末摘花の研究——荷風翁はそ

れが完成されるならば博士も

のだと云う——これは決して

川柳の冒瀆でも何でもない。

セックス文化の一分野であ

る。さて結論を急ごう。

芳泉君がトンネル時代のの

した女性の句、

本当の年が昔はれぬ厚化粧

カーテンを引いて女房の額をそ

り

雨もよし新妻殿で待つてくれ

横向いた女給に自尊心があり

廻りくごくお客をとれと云ふ女

熟れ切った果物に似たり座り様に迄成長した作家生活過程に自分は意義を認める。無論時代轉移のズレもあるが、

同君の苦惱が漸く開花したこ

とを多とするものである。し

かし芳泉君は現在の句境に満

足してはならない。勿論同君

が小成に安んずる作家でない

ことはわかるが、自分は今後

同君の世界観、人世観が益々

円熟し、作品に一層の色艶が

加わらんことを希うものであ

る。先きに本誌座談会では七

面山兄を四十を過ぎていてで

あろうと推定されたが、同兄

は三十八才である。芳泉君の

年は知らないがおそらく不惑

を超えているであろう。

これからだ。本当にこれか

らだ。

詠近舟同

瓶の銀山

大阪市長区大市
西通一丁目四
番

山銀硝子株式會社

電話堀川四七番



近作 柳樽

路郎選

虫のよい相談に来る斜陽族 大阪市 石田 沐天

社会面今日も飾つて元ボリス 同 同

現職のまゝ心中の忙しさ 同 同

不渡りへ社長へラウ／＼笑うのみ 同 同

上かん屋の社長みづから酌いでん 同 同

学者とて若い女房は好いものさ 同 同

近寄れば小じわの多いバレリーナ 同 同

ナメクジにこだわり日曜小半日 石川縣 那谷 光郎

満員車肩の毛虫を見つけたり 同 同

あの時は貰へる嫁と思はざり 同 同

二言目宅ではこうと坐り込み 同 同

メス入れにやならぬ官吏の水ざくれ 同 同

空想も現実も交ぜた喋り様 同 同

三女四女仕度の要らぬごこへやろ 同 同

熱意とかを見せに一團上京し 今治市 長野 文庫

首に輪が無い丈俺も鶉飼の鶉 同 同

約束の破棄情勢になすりつけ 同 同

女事務月給順で無い衣裳 同 同

玉音を鉛筆で書く新聞社 同 同

更生をしますと借りを踏み倒し 同 同

女事務ストの最後の列に立ち 同 同

あんなの子なら生んでみたい云々オナナ 廣島縣 黒本 芳泉

平凡な暮しに足りて女房寝る 同 同

品のない将棋なれどもあなどれず 同 同

去る者は追わず落目を意識する 同 同

人の見る程の仲でもなかりけり 同 同

墓にある戦死の地名俺も居た 同

失業に朝顔しぼむ迄見られ 芦屋市 里田一十

失業の夫を持つて御活躍 同 同

解放の味半日でたんのうし 同 同

社用族になつて藝者の名を覚え 同 同

特價でも金がいる事よく教へ 同 同

賣れました向ひの邸料理屋に 同 同

附添に古風な恋を嗤はれる 具塚市 芝 無骨

花の名を覚えしのみ恋なりし 同 同

療友を葬る 同 同

恋つゞる日記も入れて概ゆく 同 同

旅券制度復活す 同 同

勘当の代りに旅行さす話 同 同

寝返りを打てば音頭がなほ近し 兵庫縣 酒井ひかる

ベル押して暫く蜘蛛の巣を拂ひ 同 同

敷かれてる奴と思へぬ飲みつ振り 同 同

捨てられたのがしやあ／＼と嫁に行き 同 同

かさこそと食べても妻は良く肥り 同 同

お茶稽古帰れば派手に扇風機 同 同

此貨幣も手品の様に消えるべし 石川縣 山田 陽々

無一文洪笑はして見たれども 同 同

用も無く好いお住居と永居され 同 同

貧乏をすれば喧嘩をして暮し 同 同

親切の薄い旅館のめしを喰い 同 同

轉落へせめてのおごり朝化粧 大阪市 木村おさむ

混血兒抱き大股で風呂に来る 同 同

重患を見舞ひ儲けなど聞かれ 同 同

惜しみなく愛を興へた娘が家出 同 同

黒板をすぐ拭きに立つ不具の子 同 同

涼み台米の値段へ風もなし 新潟縣 伊藤 蘇子

海水着そのきわどきに母不満 同 同

宿帳へ情死しそなた名を連れね 同 同

追放の解除老兵野良で聞き 同 同



録實

三題ばし

東野大八

養子

ある夕刊読物の座談会の司会をやつたが、これはそのときに出た話である。

岐阜縣のさる町に「美濃尾張屋」という宿屋があつた。主はたまといふ七十婆さんと、家族は孫娘夫婦ときんといふ女中の四人ぐらし。或夜こゝに強盗が入り、婆さんと女中が金銀でなぐられて即死、娘は屋根から逃げて危うく助つた。この惨劇を最初に発見したのが旅帯りの娘の婿養子で、その筋に届けた足で直ちに生家へつぎのような電報を打つた。「キンタマヤラレタ。ミノオワリヤ」

受取つた生家の人たちは、驚いた。きんたまをやられたんちや成程身の終りや、養子の身で一体どうしてそんなことをしてかしたのやろ、と早速その美能尾張屋に馳けつけたが、事件に仰天してのちきんたまとは二人の被害者の名前とはじめて判つた。このいきさつは今も岐阜地裁の記録に残つてゐるさうである。

飲み過ぎて女房の威張る日が続き
 浮袋着けて泳いだとは言わす 岡山縣 同
 半分は居眠りをして受講証 同 太田 又州
 学校のテント大きな寄附の文字 同 小畑自由朗
 あみだ様え尼さん生理休暇する 兵庫縣 同
 公民館たまに開けたらエツサツサイ 同 同
 盗み水恋人の田えもちよつと入れ 同 同
 丸木橋子はサーカスの真似をして 貝塚市 藤川 播舟
 ボスの子を叱つた後の氣味悪さ 同 同
 傘さして迄も心ブラやめられず 同 同
 淺はかな女房税吏の口のにり 倉敷市 安原 玲花
 ニューフェースもう給料の事でも 同 同
 沈黙の怖わき動機をねらつて居 同 同
 色街へ続く橋からネオン見え 岡山縣 岡田 夜潮
 先生に違ひないのが踊り居り 同 同
 鐘のない寺へ秋はやしのびより 同 同
 俺も年キヤンプの監督たのまれた 大阪市 三木 泡起
 恋人に未だなつて居ず端書なり 同 同
 成人学校昔なまけて居たくせに 同 同
 忠告をする氣で噂たしかめる 京都市 村本 香果
 妹と歩いてさへも錢がへり 同 同
 一番星知らせに帰る浴衣の兒 同 同
 焼香へさて夏帽の置きどころ 京都市 佐久間折草
 天理教女の法被あわれなり 同 同
 落ちついて暮らす土工に妻が出来 同 同
 母がとぐ米を寢床で聞ける幸 和歌山 岡崎 泰三
 埃をば拭えば紫檀らしくなり 同 同
 あばらやに知性を語る書棚あり 同 同
 絶景の此処等に滝の欲しいとこ 貝塚市 堀井 一峰
 世論より首相の御氣嫌氣にかゝり 同 同
 平和署名遺兒の顔をなでながら 同 同
 うしとみしバジこのころ恋として 倉敷市 木村千代男
 円滑に時を稼いで帰納させ 同 同

御座なりを言ふから彼がのぼせの
 通夜だとして故人は故人酒は酒 出雲市 同
 弟の妻となつてた八年目 同 同
 値上りで猫まで暇が出ようとは 同 同
 再婚をして嫂に喜ばれ布味 同 同
 倦怠期妻は素肌を見せたがり 同 同
 美しい順に看護婦冷たかり 同 同
 良縁だなんて私を嫁がす氣 佐賀市 南川 光男
 テント村ひとつふたつと灯がとも 同 同
 電柱に時の動きのピラを説 同 同
 お轉婆のしおさめ近く嫁入る身 岡山縣 小林 鳴子
 細長い谷間に文化の灯がともり 同 同
 雑音に耳を借さない主義となり 同 同
 想い出のはるか彼方に灯が一ツ 北川 史風
 行水の乳房を月え惜氣なく 同 同
 裁判長訪へば小さい家であり 貝塚市 坂東法界坊
 責任を取るとは墮胎させること 同 同
 先生の肩たたきたい兒が並び 岡山縣 浜野 奇童
 ライバルも招待状の中に入れ 同 同
 明日は賣る家へ戦友尋ねて來 貝塚市 堀田 羅漢
 七夕を語る女は二十八 同 同
 誘惑へ浴衣そのまゝさそはれる 愛媛縣 堀内 曉風
 白々と嘘繰り返す刑事室 同 同
 住職の若さポマード光らせて 貝塚市 古田 雨郎
 女房が偉らすきるので二号出來 同 同
 旅は良し同名異人僕社長 愛媛縣 渡辺 曉童
 拾円の價値を子に説くもどかしさ 同 同
 看護婦の悩みと云ふはふとり過ぎ 貝塚市 多炭 若柳
 病院赤痢禍 同 同
 猫迄は隔離の処置も届きかね 同 同
 麻雀にダンスに家庭教師もし 熊本縣 岡本 昇月
 追放はとけたが杖はすてきれず 同 同
 辞職する婦長楽しく挨拶し 大阪市 西川 惠風

女なし、稀代の色魔かく豪語」といつた見出しの体裁もまことに派出。ためにこの記事に対する反響は絶大で、投書は殺到した。「この色魔はダンスの助教師であつたからかくも女をモノにした。罪はダンスにある。なぜなら新聞で見る彼の顔は決して男マエではない」というダンス絶対廃止論から「男一人に女はトラック三ばいの世の中、要するに女は男に飢えている」という生理学テキケ俗論があるかと思えば「全女性の名によつてこの男を嚴罰にして下さい。彼こそは現代の色慾の魔鬼カサノバアである。全女性に対する彼の侮べつは許せない」という柳眉を逆立て、の婦人側の反撃もあつたが最後に「一年半といえは約五百余日、ナンゴ元氣な若い衆でも一日一人強をコナせるものかネ」というのが來た。私はこの一文にぶつかつたときには覺えず失笑した。

飛★燕★往★來 (二)

山路閑古氏(東京都)より

柳祖の墓に詣でて「八右衛門江戸を語るは主ばかり」

前田伍健氏(松山市)より

滴確、充実の御発行、九月号拜受、厚く御礼申上ます。編集のうまさ今さら乍ら、敬服致しております。松山は子規五十年祭で騒いでおります。俳句界は各流各派で、むつかしいものです。 九月四日

富士野鞍馬氏(東京都)より

日日涼しくなります。どうぞ御揃い御健勝

路郎宛

ストリップの話も出てる職場風呂

俺に似て女房も好きな野球熱 吹田市

玄関の父の氣嫌を音で聞き 同

水鉄砲とりあげ浴衣に着せかへる 吳市

かば焼の匂ひと集金知つてゐる 同

自雷也に似た頭髮も戦後派の 高知市

一徹の怒りをこめた蠅叩き 同

生活苦知らずに泳ぐ子等無心 愛知縣

妻や子を泳ぎに出してビール呑み 同

バスが来て話の続き明日になり 愛媛縣

書き出しがそれならそこへ置いて 奈良縣

六地藏野辺の送りの燈がどもり 同

女学生定期のウラに友エ門 東京都

繁華街中華料理に中華服 同

友が来て子供散らかる丈散らし 岡山縣

父ちやんの子守の藝はそれつ丈 同

エチケットですと女はあまえて來 大牟田

それくの野望で合名会社出來 同

えらそぶる性分今日も靴が鳴る 大阪府

弱い意志また酒でいためられ 同

廣告の特價ばかりを見るくらし 貝塚市

あほらしいと云ふ志が一兒の母 同

焼酎があれば暑さもなんのその 荒尾市

逢へた夜のチャンスじゃれつて吃り 同

夏祭り三等郵便局休み 貝塚市

共稼ぎ洗濯物を星へ干し 同

同

橋本 幸男

同

松永四季無

同

松下一徹郎

同

松尾 北雷

同

黒川 秀義

同

平井 良兒

同

田中 稲水

同

松尾 千恵

同

新谷 風浪

同

青柳扇子仙

同

上田 耕平

同

山崎青粒子

同

浅川 桑南

損得が無いと判れば割勘で

おまけの金魚一匹生残り 貝塚市

囁くに滝音少し煩さすぎ 同

肉体美見せんが爲か海に決め 岡山縣

髭そつた時が本当の年に見え 同

洗濯をすれば独身かと聞かれ 貝塚市

袈裟衣トランクに入れ僧若し 同

かくなれば学園とても頼られず 石川縣

晩酌へ妻の言葉も世帯すれ 同

医学とは別に名医にあるまこと 京都市

才能の貧しきへ妻よく仕へ 同

商魂とやらがもみ手を復活し 岡山市

老車夫え訊けば病妻おります 同

生さぬ仲間同じ浴衣を二反買ひ 京都市

散髪も順番があり子沢山 同

設計図だけに理想をこども置き 貝塚市

金魚もう夏の終の泳ぎ方 同

憂鬱を飛ばせと一枚ぬいてくれ 京都市

行商の背に蠅のせまるなり 同

髪の型変えてマダムに閉があり 熊本市

打明けぬ中に時間の來たポート 同

小言にも自己満足の母若し 石川縣

子を叱る言葉に過去の我もいる 同

公休を待つてたように大掃除 大阪府

七人を支える靴の砂ほこり 同

宿先きで借る釣竿は浴衣がけ 大阪府

同

和田 一律

同

大塚美能留

同

望月 酋魚

同

塩谷三思楼

同

山上 欣也

同

山本 焦兒

同

鈴木加代子

同

香木凡太郎

同

藤原みてい

同

森口 鶴堂

同

加能 潮人

同

木村 水堂

同

森本黒天子

を祈ます。もう蚊帳もいらないうでしよう。

九月号を早々と拜受続いでのお骨折感謝申

上げます。お瘦せになった由私も同様で

す。年とると瘦せた方がよろしい。少量を

数回食べる方がよいと存じます。九月六日

安久留美氏(金沢市)より

路郎宛

いつも御健勝で何より頂上。「川柳雜誌」

九月号巻頭の貴稿「蚊帳」をよみて、往年

九月神戸市での初対面時代を偲ぶ。それは

二人が須磨のみの作氏を訪れ、白い蚊帳に

疲れたからだを横たえたこと、大阪に入り

待合に寝た時は、蚊帳の記憶なし、京都で

は二山氏宅に夜遅く二人で蚊帳の中へ這入

つたやうに思う。何しろ二百十日もすぎた

東海道の旅、一路東京に向つて先づ郷土人

佐野平六茶居に笑字坊氏とあい、その時分

は神田の義兄宅に止宿して「蚊帳」も名残

りのあとだった。思へば四十年前の蚊帳の

夢である。

高尾亮雄氏(三朝温泉)より

路郎宛

図らずも久々の会見うれし、雑誌車中にて

精読、賛助名中にある浅田一は東京に十六

年臨床中の医博ならずや、それならエスベ

ランチストで、度々訪問した。南苑寺タカ

美顔水

にきびとり

美顔水

路郎宛

美顔水

路郎宛

街録の東京の女よくしやべり
 上品に食べた西瓜を惜しく捨て 米子市 同 小西 雄々
 軽装の毛脛に夏の日はまとも
 添う等と男は軽く約束し 愛媛縣 同 村上 和子
 二号とは知らず愛想よく妻の
 音だけの花火待つてる生ビール 東京都 同 松井 蛙声
 誘惑を絶ち療養所今静か
 たくましましきものと思へど杉は杉 徳島縣 同 廣瀬志津雄
 川をみる振りして貌ばつち見入り
 パスゆれたお蔭で席をゆづられた 京都市 藤原 和朗
 一と月も病めば意見も憚られ 出雲市 久家代仕男
 呆氣なく名物 男退院し 貝塚市 武安 嘉彦
 たゞ三日それで貴方は死にました 岡山縣 清水 悠貴女
 間違つて先妻の子を賞めて居た 貝塚市 清水 羅洲
 将棋する人の口ぐせもうやめた 枚方市 山本 信陽
 泳がずに居れば海辺も暑いところ 貝塚市 河楊 梵鐘
 サンダルの際を狙つて蚊が止り 熊本縣 鹿本 実信
 折詰の味彼女の腕ではないらしい 貝塚市 磯部 白砂
 行戻りなのに財産鼻にかけ 岡山縣 末房 至孝
 海水浴人魚の群に押れ氣味 愛知縣 尾崎 久平
 俺に似て影まで何んど淋しいね 貝塚市 岸 まさる
 雲の峰パスが突込む世とはなり 愛知縣 岩瀬 雨蓮
 妻恋えば子も亦母の想ひ出を 岐阜縣 石神 定治
 洋傘を駅の賣店に置き忘れ 愛知縣 津川 竹坊
 遠慮なく飲んで見合が駄目になり 貝塚市 渡辺 圭史
 女房の肉のたるみも海水着 愛知縣 矢橋 乙助
 敬礼が今でもあつた汽車電車 奈良縣 大森丙子朗
 店先へあるだけ出したマーケット 倉敷市 三島 寛造
 賣店でこつそりのんでみつけられ 愛知縣 本多 柳人
 お父ちゃんはんは飲まばかり居る海水浴 愛知縣 平岩寛太郎
 平社員としようすくいで名を知られ 岡山縣 河野 徳丸
 夜店へと妻は夫に子をだかせ 愛知縣 武内 夢佛

お隣の二階朝まで牌の音 和歌山 岸本 木魚
 水泳ぎ新婚らしく人をさけ 愛知縣 太田 劍坊
 絵日傘を乗せたボートはよく迂り 玉野市 迫田美婦適
 会社では一應威張つておれる椅子 岡山縣 相原 一善
 温泉はぜいたくでない年の暮 熊本縣 西野斗四翁
 轉勤に事務引継もない身分 倉敷市 野田素身郎
 新型の水着はみんな濡れて居す 愛媛縣 青野天下堂
 一人故の心疲れを夕焼に医す 今治市 渡辺 逸
 捨る氣か今宵キツスの荒い事 岡山縣 大家 成夫
 七夕と藝者の浴衣良く似合ひ 下関市 伊織 柳人
 蘭草干す爲めに出来てる道ですか 岡山縣 池田 古心
 マネキンの良いのがをって椅子が 岡山縣 田中 敬實
 甲斐性者の次に來た因果です 出雲市 石橋 齊兆
 逃げる子は追うまい俺に責はある 下関市 加藤 司稜
 浴衣出せ俺も習おう盆踊り 出雲市 原 一月
 写真までのせて名馬の死をいたみ 京都市 井上 吉造
 名前さくだけで顔色変る恋 昔屋市 後藤 志津
 また意見されそう娘ツンと逃げ 京都市 田中 牛治
 供へても喰はぬを嘆きつゝ供へ 岡山縣 葉山 縁二
 京染を京に暮らして買へずいる 京都市 若山 圭草
 家出した時と同んなじバスに乗り 出雲市 沢田 吐泉
 こゝも亦サノヨイの盆踊り 大阪市 永田六竜子
 末つ子のきかぬ氣亡父思ひ出し 岡山縣 北口 草人
 子供より親が苦になる新学期 大阪市 長谷川義英
 派手になる水着へ母の歳が見え 佐賀縣 中村 魚灯
 恐ろしや子供でも千弗も貯め 布 哇 白砂 旋風
 可愛さは異國の人も小鳥籠 米子市 石谷 風塵
 深水が描く美女にも浴衣着せ 京都市 上村 春風
 夕涼み妻は最後に出て涼み 宇治市 山田市 松森 健二
 キャンデー屋へよい雨で言ひかて 徳山市 徳重 眞廉
 久方の紙幣二三度弾いてみ 大阪市 貝塚谷恒良

池澤樂居氏(姫路市)より

路郎宛

(葉書の表に)お夏清十郎祭の時、食滞南
 北君に久しぶりに遇いました。九月一日
 (ハガキの裏に)九月号拜見、お夏清十郎
 御掲載下されありがとう。姫路支部の句会
 を一タ「日の神」教團で催されては如何と
 夷一笑さんに御連絡下さい。ニコく主義
 エピスタイコク祝讃の「日の神」教です。
 屹度よろこんで頂けるでしょう。交通も至
 つて便利の最も回数が多いバス停の附近で
 す。支部所在地わかれば私からも案内いた
 します。

大森風來子氏(岡山縣)より

社宛

(前略)高田豊高口豊が正しいので御訂正下
 さい。保健婦、助産婦、看護婦法が一部改
 正されましたので目下夏休みですが一部改
 多忙を極めています。弓削の大会では奥さ
 んにはお会い出来る予感があります。是非
 お出下さい。

楽しみにしてお
 ります。八月廿
 一日(路曰ク、
 なか巧妙な
 戦術で狩出し感
 謝の外ないが、
 ウチの奥さんの
 尻の重いことは
 あまりに有名で
 過日竹莊君が
 銀婚式には非出
 席するよう膝詰
 めの招待もトウ
 トウ尻をあげな
 かった。折角の
 子感も九九パー
 セントダメだと
 思はれたい)

山之内

避妊の為に

サンデー

250円
 205円
 180円

セット
 セリ
 同上



の性男 語物期年更

年満本藤

私は若いときから殆んど病氣らしい病氣をしていない。私が若いときからなどと如何にも先輩らしい口の利き方をするとクス／＼笑う人があるかも知れない。しかし勤め先ではぼつ／＼若いときならば「なご」という口の利き方をせねばならぬ年齢になつてしまつてゐるのである。そうはいつても、自分の氣持としては決して初老に達したというようなことは少しも感じていない。二十代の青年にまさるものではないとの氣概をもつてゐる。体力も精神力も元氣旺盛を誇つていたのである。勤めの都合で、私は四つの役目を兼務した当時、路郎師は川柳雜誌の「不朽洞会から」へ、鉄の身体もそれでは続こまいと書いてあつた。

私はそれでも自分の鉄の健康に十二分の自信と己惚れをもつてゐた。元來非常に呑氣のゆから、ホホンと毎日が過ぎてゆくものぐらゐに考へていたのであつた。その已惚れこそ、そも／＼の間違いであることは後になつてわかつた。子供のころから一度も經驗のない歯痛が起つたり、つまらぬことに下痢したり、レントゲン写真で肺炎に疑問をもたれたり、全く散々のていつたらしくあつた。

しかし、十二指腸虫が寄生してゐることがわかつて、それを完全に驅除すると、レントゲン写真の疑問は間違ひであつたことが証明されたし、再び鉄の健康へ自信を取り戻したのであるが、胸中一点の不安がないでもなかつた。それは「男の更年期」ではないか。そして更年期障害が緩漫に現われてゐるのではないかと、いつかのことであつた。そのころ私の句に、
更年期内科外科齒科忙しい
というのがある。この句は私の心の煩悶を、詠つたものである。どうヒキ目に見ても、漢字過多症のこの句は、好感のもてるものではなかつた。幸か不幸か、川柳塔へ送る雑吟の句数が足りないの

で、句数をふやすためにこの句を加えたところ、幸運にも川柳塔の選に入り、さらに路郎師の「新川柳評釈百句」の第一回（二月号）に登載の光榮に浴したのである。路郎師の句評には、更年期について、男性とも女性とも、區別しないで、あわれはかない更年期の忙しさについて例によつて名文の解釈がほどこされてあつた。しかし私としては男の更年期を意識して詠んだ句であるから男性に更年期があるかどうかに、多少の責任を感じていたのである。大学のプロフェッサーに聞いてみると、男性だつて更年期はありますよというだけで、医学的には何も説明してくれない。観念的に男性の更年期を語るのであれば、敢て医学博士に質問するまでもない話である。

そこで私は男性の更年期を医学的に確証をつかみたいと思ひ、会社の図書室でいろいろ辭書をひつきり返えしてみたら、満足すべき結果は得られなかつた。その後私は二ヶ月近くも会社を休む病氣にかかつた。病氣は濕疹というつまらぬ皮膚病で、大したこともないはずだが、四十一度という高熱が二回も襲來するほどひどい目に遭つた。濕疹ぐらゐで、なぜそんな目に遭つたか。私もこんどは濕疹についての多少の知識をもつことになつたが、ここでは濕疹論を説くのが目的ではない。私は長く会社を休むような病氣になつたことと、男性の更年期についての関連性について思ひをめぐらしたのである。

こういう心境にあつた私に対して、これはまた好意あるアレセントのように交養春秋九月号は日本医大教授木田文夫博士の「男の更年期」という洗物を掲載してくれた。まことに軽妙な文体で、素人にもよくわかる医学智識を興えてくれた。女にある更年期は、やはり男でも証明される。とあるので、私も大いに男性の更年期の存在に自信を深めたのである。しかし、惜しむらくは、更年期の時期について私の考えと可成り大きな差違があつたのには失望した。木田博士は、
男子が性的無能力になるのは六十才、七十才の年齢だから、更年期障害というよりも、年がよつたせいだと考えられやすいのだ。ともかく女子とちがつて男子の更年期障害は、一般にその時期も、症状も、老人性障害といつしよになつてゐるといつてゐる。大体博士のによつて、女子の更年期が月經閉止にあると同じように男子の場合も、性的能力の終止期をもつて更年期としてゐるのである。女子の月經閉止が、性的能力の終止であるかどうかが私はよく知らない。しかし更年期とは性的能力の終止を意味するとすれば、私たちが四十代のものは、最後の道標に達するまで日暮れの道を歩かねばならない。

医学的に男性の更年期のあることは木田博士の文章によつて証明されたが、更年期の時期と更年期障害のあり方については私の考へていたことと相當の隔りがあつた。女子の更年期が、四十才代であると同様、男子も四十才代に更年期があるものと考へていたのである。殊に性的能力ということ、多少の関連性があるとは考へていたが、それが絶対條件とは考へていながつた。私の考へでは、少年から青年、青年から壯年へと人間の体が發達し、こんどは逆に老年への衰えを見せるために體質に一大変化が起る。それが更年期であらうと思つていたのである。

私の更年期の句は、そんなわけで、私の実感句とすれば医学的には間違ひがあることになるが、観念的には諒解をしてもらうことが出来ると思つてゐる。しかし、柳人中には六十才、七十才の人は随分多い。従つて一般論としては、その人たちは更年期が來てゐるわけである。従つて性的能力もついに終ろうとしてゐることになるが、こと文学に志す人々として、お色氣のないことになつて、いかに人生が終つたかの印象を残すことになるようである。

そんな印象を興えるようなことになれば、まず路郎師に大変なお叱りを受けるであらう。若年路郎師をもつて自他ともに任ずる路郎師をばじめ、老後ますます／＼／＼かしく／＼たる元氣な人々が多い。老らくの恋の川田順氏や塩田温博士がこれを証明してゐる。私がたま

たま四十代で、医学的にはまだ更
年期に達していないから、六十才
や七十才の人々を、一がいに更年
期として、冷然として論じ去つて
しまつたのでは、後の祟りがおそ
るしい。

そこでもう一度木田博士の文章
を引用する。

性的にすつかり無能力者になつ
てしまふ人の頻度は、六十才では
百人に五人か十人くらい少いこ
とのようだ。七十才になつてやつ
と二分の一前後が無能力化するに
すぎぬといふから、老らぬの恋に
心配してあげる必要はない。そし
て八十才すぎても毎週一回すつかり
正常性交を行うことのできる老
人があるときんせいは報告した。
六十才代になつても、週に二回ぐ
らいの性的活動、フランスの民間
でいう「木曜と日曜のおつとめ」
を、持ちつづけることのできる男
子が案外に多いといふことだ。ま
た七十代で若い婦人に子供を産ま
せた実例は、世間に数が多い。そ
んな人の精液には、数は少いが完
全な精虫が証明できるそうであ
る。

というのであるから、女子の更
年期のように、男子は一定の年齢
になれば必ず更年期が来るとい
うものではないらしい。まして更
年期が来たからといつて、女子は
ご更年期障害といふものも顯著に
現われるものではないようである
から男子たるもの大いに安心して
可なりである。「意識する、故に
障害あり」というデカルトもごき

の標語で警告しているように、相
当の老人になつても、更年期障害
などを気にする必要はなく、たゞ
単に川柳として軽く詠みあげるだ
けで十分である。私のように、男
に更年期があるかどうかを調べて
みようなどと考えるのは馬鹿の骨
頂だつたといふことになる。

ただ木田博士はホルモンやヨヒ
ンピンのような附け焼刃でなく、
ほんとうに老衰を遠ざける手段は
ないだらうかといふ問題につい
て、まだ一つも学界でみとめられ
た確実な方法は存在しないといつ
ているが、リーダーズ・ダイジェ
スト日本語版八月号にはホルモ
ン・クライフという筆名で「働ら
きざかりは延長できるか」といふ
随物は、テストステロンという新
しい合成ホルモンが発見されて、
五十才から七十五才までの間にす
つかり衰えてしまつたたくさんの
男性に新しい生命を興えることが
できることがわかつた。と、いろ
いろの実例や実験例をあげて説明
している。世の中の進歩というも
のは有難いものである。人生は実
に長く楽しめるようになってきた
ものである。

この不老長生の妙薬テストステ
ロンはまだ廣く用いられないのは
値段が目玉の飛び出るほど高いこ
とによるため、やがてインシュ
リンやビタミンBの発達の場合の
ように生産力の増大と化学者の創
意によつて、間もなく値段も下り
それが必要な人には誰でも使え
るようになるであらうとの結論が
出ているので、すでに老境にある

人も、これから老境に入る人も、
更年期なごさらく心配の必要は
なく、大いに人工青年時代を樂し
むことができるというものである



漫画 パンピ

水谷 鮎美
パンピのママとフアーリン(牡鹿
パンピの妻)の眼使ひが智能的で
あり印象にのこる人間界にもあれ
程の慈眼がほしい。然し川柳眼の
中にある一つの瞳だれ。克てない
れ。

一恥かしがらんでもいいのに。
服部 十九平

十九平「名所旧蹟ばかりが観光資
源でもあるまい。無形の文
化も貴方の仕事の対象だら
う」

観光課長「勿論そうだ、其の方面
へも力を入れる」
十九平「其の手始めに弓削の川柳
を取上げられたい。西日本
川柳大会へ賞を出すこと、
岡山駅前ガイドマップへ
「川柳の町弓削」を入れる
こと」

観光課長「両方ともOK」
岡山駅に下車した諸士よ、ガイド
マップを見落し給ふ勿れ。

颯風を美化する
水谷 鮎美
去年ジェーンが襲った時は床上三
尺の濁流へ私は「美化すればウェ
ニスとなつた夜の街」と詠みまし
た。本年のノラはもう接近してゐ
る。なほ美化される、OPQが続
く事です。世はさまざま。

九月一日記
講和調印式の
日によせて
弘津 柳慶
戦後派の方々ももう目醒てもい
い頃です。東洋には東洋の美風が
あります。
古くとも僕には仁義礼智信
けつして古くはないのです。

阿波の壺峯剣山へ佛法僧を聴き
にいづたら、けちくさい時鳥が、
ハイキユウ ウケタカ ハイキユ
ウ ウケタカと鳴きよつた。

快調音
西尾 葉
寝ると放屁の癖があり。今宵も
二、三発、快よい響をたてる。古
妻ともなれば、叱りもせず、あな
た、今のは逆もリズムカルよ、
そうさ、へ調だもの。

頭痛新薬
タミミン錠
アメリカ・アイバリス・リー社
特許サニテープ自動包装使用



愉しき哉

頭痛新薬

タミミン錠

頭痛新薬
頭痛なき人生



徳川家康と金扇

の馬標

阿部 義雄

「柳多留」に徳川家康馬標の金扇を詠んだものが字何句か見えてゐる。そして、この馬標の由来については、二つの異なる説が傳へられてゐる。

「本多中務大輔忠良にも、家をつたふる武器の事御たづねありしに、そのかみより傳へし扇形の記号旗は、安祥殿(松平清康)より、先祖吉左衛門忠豊に下され、平八郎忠高、中務大輔忠勝まで用ひ來りしが、東照宮の仰によりてこれを獻じ」云々(有徳院御実紀附録卷七)「永祿六年の比、牧野半右衛門康成が金の扇のさし物御意にかなひ、御所望ありて御馬印になされ、熊毛にてへりをとりて用ひられ云々」(武辺雜談)

川柳で見ると、この馬標は五本骨の扇子であつたらしく、句には儒教の五常の道などを持ち出して詠んでゐる迎合的なものが多い。

馬標に限らず、川柳に於ては、徳川の家徴とも見られる葵・松に関する句には、礼讃的・迎合的・阿媚的な傾向

のものが殆ど定石となつて居り、他の紋章句などの様な皮肉・諷刺などが全く詠まれないのが特徴である。之は一つには御膝元の江戸つ子のことであるから徳川氏を悪く言はなかつたといふことであらうが、もう一つは、この封建の最高権力者に対する月並的の御世辞でもあつたであらうし、徳川を批議することによつて直ちに覆ひかゝつて來る刑罰に対する恐怖の念が江戸つ子の意氣を海月の様に軟化して了つたものと見てよいであらう。

特に、寛政改革以後の川柳には此の傾向が強い様に思はれる。江戸川柳子が威勢のいい反抗的態度や軽侮的の念を示すのは、第二次的の権力者に対してであつた。之に勿論刊行・公表といふことを予想したからであらうが、寛政以後に於て、彼等が最高の権力者に対し冷淡ではなく濃厚な媚態を示し始めたといふ点は

大いに注意すべきである。徳川家康の馬標の句は、家康礼讃に終始してゐるばかりで、表現上の変化も少く、視角の多様性も見られない。家康の馬標の句の中で、いくら面白味あるのは、関ヶ原の戦に関する句くらゐのものである。

御扇子で螢押へる関ヶ原 (柳多留六〇編)

螢は尻で光るといふわけで男色の意味——此処では石田三成のことである。

ばんじやくを扇でくだく関ヶ原 (四二編)

源翁和尚が那須野ヶ原に於て殺生石を打擗いたのに対し、家康は三成といふ毒石を、関ヶ原に於て擗いたといふのである。

毒石を扇で砕く関ヶ原 (一五六編)

砒霜の毒を金で消す関ヶ原 (一四二編)

「金」は家康の馬標の金扇をも言外に含めて詠んだものである。

これより先の句に、家康が武田氏と葦原山で戦つたことを詠んだ、

御扇子のゆえ鷹の巢を打ち落し (一三八編)

といふ句があり、又、豊臣秀吉を小牧山に於て苦戦させたものとして

猿を散らした日の丸の扇風 (一〇一編)

霧の晴間に胆をぬく五本骨

「胆を抜く」と言つたのは、「猿の生肝を抜く」といふ語を想起させようとする文句であらう。

家康の馬標の金扇は五本骨であつたらしい。

五本ばれ末廣となる御印 (七五編)

御静謐末廣がりの五本骨 (一一九編)

御開運五常を表す御扇子 (三六編)

五常とは、仁義礼智信である

御扇子は五常をこめし骨の皮 (九六編)

御扇子の要は仁義礼智信 (八二編)

日に光る骨は五色の御扇子 (四八編)

「日に光る」は日光の東照宮にかけてゐる。

扇子は末廣りとして子孫繁昌・一家繁栄を表徴した目出度いものとされてゐるので、御扇子は御運のひらく御印 (五九編)

すばまらぬ御扇子になる御立身 (五八編)

之等はみな家康の馬標に因んだものである。扇子は、風を起し、万物を靡かせるので、御扇子は君子の徳の風を出し (三九編)

御扇子の風は天長地久なり (七二編)

御治世も扇になびく御道筋 (五五編)

御扇子は天にかやき地になびき (三八編)

お扇子も虎も五日の風おこす (三三編)

徳川家康は寅年生れであるので、「虎嘯起風」などの文句を持ち出したのである。その風も五風十雨で、風雨をそれれ其の時を得て、農作上頗る好都合であり、御蔭で、天下が静謐だといふのである。

御扇子の風で味方は暑にまけず (五九編)

御扇子に風も當りの御代と成り (三八編)

御治世の扇も向ふ人はなし (六四編)

又、扇子は物を煽ぐものなので、仰ぐに掛けて、さしもの大将仰がるとは扇なり (一一六編)

有難さ仰ぐも高し御扇子 (四一編)

扇子は、また、たゞみ込んで保管するものである。そこで御扇子に四海の浪をたゞみ込み (四八編)

御馬印は乱世をしづめ折り (九四編)

扇をたゞむ時、その先端が固く締る様にする折方が、しづめ折りで、句は世を静めるにかけてゐる。

箱入りで御扇子は出ぬ御代の春 (一一六編)

(家康の)金扇の馬標を持ち出す必要のないのは御世泰平の証拠。

御扇子の骨ほどに折るかきつばた (四五編)

在原業平が駿河の八橋で詠ん

だ歌は「かきつばた」の五字が折り込まれてゐる。「から衣きつゝなれにしつましあれははるく來ぬるたびをしぞ思ふ」。家康の金扇の馬標は五本骨の金扇。

之は深溝氏三代にわたる武勇を其の家紋の重ね扇にかけて詠んだ句と見られないこともないが、御武勇であるので、家康の武勇を金扇の馬標によつて表したものと見て此処に

御扇所は扇の御代のかなめいし

（宝歴九年閏七月十五日）玉」と言つたこともあり、親玉の出端きつかけに扇の手

右の句なども馬標の金扇と歌舞伎の所作とをかけて詠んだものではないかと思ふ。

一路集

バス 尼 緑之助選

△乗降、停発

土砂降りのバスも、一人待つてや入院の荷物をバスに断られ郷里の土になる氣のバスに乗り

急停車お守り札が落ちかゝり秀急停車お巡りさんがお乗りや婆さんの歩巾へバスは待つつもりバス埃り夕立少し浴びて着きバスを待つ恋のさゝやきバスが来る

△人 事

私鉄並バスも値上げのストに入りエンコしたバスにハイカー元氣きストの車庫銀バス艶もなく静か佳、盡きもせぬ名残へバスは遠ざかり人、出勤をバスにしてゐる株を持ち天、もう用のない仲人をバスに乗せ

△車 中

恥しい二人をバスがくつゝかせ朝逢うた顔が揃つた帯りバス

（七五編）

入れて置く。

御扇所は実には日の本の要也

（一一一編）

この句の前句は「所」に「に」となつてゐる。

（文 政）

又、徳川時代各所の関所を扇の末廣にかけて祝いだ句と

江戸の頃、市川團十郎のこを親しみ敬つて「親玉」とも言つたものであるが、また

時には將軍家のことをも「親

バス揺れて河内訛りの怒鳴り声 扇子仙

溜息が深い、轆輪バスの揺れ 芳 仙

マスコットバスがこんなに揺れてるぞ 芦 穂

触感を尙かき立て、バスは揺れ 七面山 地

佳、夢未だ醒めず出勤バス揺れる 蛙 声

秀、長男を膝に帰郷のバスに揺れ 七面山

△終始発

始発バスまだ醒め切らぬ町を抜け 芳 泉

佳、始発バス唄いつもの、ここに掛け 山雨楼

終点のバスは置き去り食つたう 日本村

終バスの後は明日まで続く闇 芳 仙

△観光、遊覧

バス揺れて、こゝらば遊覧地 三思樓

バスが行く所まで行く日曜日 純 香

佐渡のバス忘れしやなむおけさ節 芦 穂

佳、車掌今日絶景に飽く無表情 寂 坊

佳、雲仙のバスへ小湊は谷の底 七面山

△村・山

峠今玩具の様に下るバス 光 葉

夏の雲バス懸命に田舎道 夏 六

佳、田舎バス小まめに乗せて駅に着き 同

日に二度のバスが話題を運ぶ村 十九平

砂けむりかけて谷間へバス曲り 忠 美

村端れバスは言傳きいて呉れ へとち

砂ほりの中にガタバス追ひ越され 芳 泉

△バスガール

バスガール声も仕事もはずむ朝 曉 舟

バスガール交替をして別な声 芳 泉

バスガール足の先まで見つめられ 鉄 兒

同 同

秀、バスガール声で名所にしてしまひ

（選後に）天の句は、結婚式前の華かき

を見送る新郎新婦、軽妙なスケッチが生

きてゐる。選外の中にも捨てがたいもの

が相当ある。投句の各位の参考にありに

トを別にしてゐるので御希望の方は小生

宛お申込みあればお送り致します。

（出雲市高松 尼緑之助宛）

母

上田翠光選

満足な余生を母は嫁と住み 又 洲

染めよつか母の白髪を増えをこ 夏 六

母だけが起き、呉れた時化の夜 木 魚

娘の捨てた所ち屑母は捨てきりや 木 魚

母連れて母の歩みのまゝ歩む 草 骨

蔭になり日向になつてドラにする 蘇 子

母父を叱り田 潤なる家庭 山雨楼

ヘソクリを母一寸だし、ライト

母親の意見裏まで見すかさね 如 川

何方にも組せず母は笑つて居 草 人

なりふりをいとばぬ母の束ね髪 卯之助

いっまでも危ながつてる母であり 抱 玉

それでゐて母は少しも貯めて居り 日本村

末っ子に育つて母の白髪抜く 葉 光

聞き分けが母を泣かせる水枕 光 葉

母がして呉れた通りに子を育て 千 舟

食ひ残り皆片づけて母達者 鉄 兒

云ひ出せぬ無口を母は知つて 青 粒 子

出来過ぎるのが継母の氣に入ら 若 柳

長男は二度目の母と趣味が合ひ 十九平

店長が母の印なら貸すと云ふ 斗四翁

母独り死ぬまで郷に住むと云ふ 光 郎

産制を氣づいたらしい里の母 若 花

母の顔知らずミルクで肥えてる 翁 魚

道樂のない子へ母は物足らず 水 堂

母の掌を額に知つた熱の中 蛙 声

旅立の母に切符のしまいで、三思樓

母のない淋しさ雲に呼んでみる 雄 々

派手を選る母のアブレが悲し ひ かる

佳、見ぬふりをして母さんが見てくれる 敬 貢

汽車の窓母には何の怨もなし 山雨楼

叱られてゐながら母に味方する 方 大

母からの便り鉛筆なめた跡 蛙 声

嫁が来るまでコロツケを知らぬ母 寂 坊

人、新しい母と揃いのワンピース 甲 馬

人、母の日の母はやっぱり忙しい 富 郎

人、母一人、こぼれるものに氣を配り 鮎 美

地、いつか子の名前で貯金してる母 吉 造

母一人信じて呉れるのが重荷 芦 穂

不朽の賞

把持者の横顔

現職は郵政事務官

西森 花村氏

(六月旬会優勝者)

郵便配達受持区域に香林さんが居られたので川柳の縁ができた。或は簡易保険の勧誘が逆に香林坊師に口説かれて佛門ならぬ柳門に入ったのかも知れん。

終戦のささくさに両親に亡くなられ、子供は田舎へ預け、只今は氣樂な独身。暇があるので映画、演劇、能などを見に出かけるのと

こと、特に絵の鑑賞に通じ、新しい洋画への造詣も深い。優勝当夜の天位は、見るごとく見ざるがごとく見合する



明治生れながらなおこの夢が持てるから羨しい。大阪生れに似合わず訥弁で、何処の山奥からポツと出てきたのかと思われるほど。子供の頃歯を折って大人になるまで入れずにいたら、こんなに下頰

が出て言葉が洩れる。だから話するのが嫌い。引込み勝ちで、人の先へ立つことも嫌いと、おつしやる。だが、優勝は大いにうれしいらしく、もちもちと喜色満面。明日からやめ暮しの部屋でカッパが新妻のように光彩を放つたろう。健闘を祈る。

南洋歸りの趣味人

東 喜久堂氏

(七月旬会優勝者)

当年六十二才、光自動車工業Kの重役さんで、川柳は六十の手習いで一昨年白柳子さんや玲之介さんに手ほごきを受け、今日もグループで川柳や俳画をやつてをられる。はじめて旬会に出たのが菊の頃で、ふいにつくつた雅号が喜久堂とゆうおまんごゆう屋みたいな名。菊や朝顔づくりが大好きだが、野趣を愛し、名人風でなく、質より量で数はふえるが花がだんだん小さくなる。

南洋は、二十数年前にジャバ、十年前までボルネオに滞在された「もつ時效になつていますから、カーヌのロマンスでも一つ……」ジャバへ上陸したトタンに土人の女にキッスされて驚きました



時間外禁止されていたが、浴衣がけで日本の藝者とアベックで通抜ける一歩前で印度人の門衛に誰何され、コミッションを一弗から十弗までせり上げられて、問題を起さずすませたことがありました。しかし、黒い子供なんかつくらなかつたから安心したまえ

不朽洞

会から

▼麻生路郎師は上田翠光氏と同伴、八月廿二日に赤目四十八滝の深山莊に河上一也画伯を訪問、句を彫む岩壁の实地踏査をされ其夜帯版された▼中島鉄洲氏(鳥取市)は鳥取縣工藝会主催十月下旬の展示会の出品作品を目下準備中だとのこと氏は同会の理事▼亀山晴峯氏は大阪市

阿倍野区相生通一丁目二番地へ移轉された▼山路閑古氏(東京都)の夫人が病氣されていられたそうだが、最早全快の由余後のいよいよ健康であることをお祈りする▼白川朋吉翁(大阪市)は弁護士生活五十年以上に対し過般東京で表彰せられ又最近追放解除になられた温容な翁のためお欣び申上げる▼吉田水車氏(名古屋市)が八月卅一日來阪、川雜千日前連絡所へ來訪されたが路郎師の出所時間前だつたので久しぶりの談話を交されずに帰名された▼淡田久米雄氏(岡山縣)は夕刊山陽第二十回誌された句は「制帽でわが行く道の

はるかなる」▼戸倉普天氏(兵庫縣)は八月廿二日から上京、ついで足利地方、館山地方、名古屋地方へ廻遊された由で句信を寄せられた▼太田良子氏(大阪市)は八月十五日に男子を儲けられ産後の経過良好とのこと、お欣び申上げる▼山田季賀氏(廣島縣)は九月四日長男幹雄君を儲けられ母子共にお元氣の由およろこび申上げる▼南捨舟氏(大阪市)の夫人の母堂井上マキさんが九月五日に永眠された謹んで悼む▼米田孤舟氏は九月十四日早朝、就寝中心臓麻痺で急逝された謹悼、自宅は大阪市東淀川区三國町九二一▼麻生路郎師の胸像がモニュマン協会の会員白石正義氏の手で製作され大阪市立美術館で九月一日から十六日まで開催の創造美術展の第二彫形彫部に展観された▼丸山弓

阪田謄写版

株式會社 阪田商會

大阪北區芝田二五

電話 五九一 九一五 番 一三六 番 四

芝鶴

一品料理と生そば 上六キヤビトル映 画館 東三軒目

新会員紹介

九月

- 東 喜久堂氏(大阪市)正
- 白柳子氏推薦
- 天貧氏(大阪市)正
- 香 林氏推薦

いのちある句を創れ



投稿規定
用紙は原稿用紙、文字を正確に開き、月日及場所記入、締切毎月廿五日、投稿先本社宛

本社八月句會(大阪)

八月四日 午後六時半

於 大室文化会館

句三昧に暮さなして酷暑の句会場は窓から流れ込む川風さへも氣付かぬ様であつた。路郎氏は数日来健康を害してゐられたので、柳話は抜きにして、鮎美氏の句評に移る。夏六氏と耕平氏の句があげられた。兼題、席題の披露後採点發表をして九時閉会した。本月の不朽詞體勝力ツブ把持者は森下愛論氏であつた。

出席者 路郎 七郎 六童子 鮎美 喜久堂 芦穂 黙平 博也 鬮骨 哲水 天貧 豆秋 梅里 紅山 水堂 泡起 恒明 風路 淡舟 愛論 萬樂 翠光 扇下 仙 十字路 夢裡 没食子 幸男 牛歩 綠雨 春柳 栗 古方 貴山 いわを よか後 竹莊 紫香 梨里 霞乃

兼題「氣まぐれ」 麻生 路郎選

氣まぐれに血圧計りあわて出し 春集
氣まぐれな女の嘘の美しく 梅里
女秘書社長の氣まぐれ知つてゐる 竹莊
氣まぐれのハダシになつて水を掻き 夢裡
氣まぐれと知らず純情貢ぐなり 翠光
氣まぐれに受けた試験で初段なり 七郎
氣まぐれ云ふパチンコで光二箇 十字路
氣まぐれの男心え返向ふ氣 鉄兒
橋の上まで西せんか北せんか 十字路

氣まぐれに画いた裸体えへをきつて 春柳
氣まぐれの女に生命縮められ 十九平
女房の氣まぐれ一杯頂戴な 栗
氣まぐれの散歩千田札拾ひ 紫香
氣まぐれにのどろこカンヌ煽がされ 紅山
氣まぐれに総理捕物帖を読み 泡起
氣まぐれに買ったが前後賞になり 十九平
氣まぐれが来て嘆きだけ涙り去に 牛歩
氣まぐれの一言ついでに根にもたれ 扇下
氣まぐれの墨絵にしては惜しい腕 愛論
氣まぐれの指織の親押しつぶし 古方
用もないのに吹田まで汽車にのり 古方
氣まぐれの縁さ云えぬ子が五人 豆秋
氣まぐれの一人へ皆んな待受け 天貧
酔ふていだから土産を買ふて来た 梨里
氣まぐれな恋は女をみせたがり 風路
氣まぐれの今日は風呂の水を汲み 翠光
氣まぐれの接吻でしたさようなら 夢裡
氣まぐれに飲ませた味を子はおほ大 七郎
氣まぐれに飲ませた味を子はおほ大 七郎

兼題「下駄箱」 戸田 古方選

下駄箱の一番下がこわれてる 風路
下駄箱は開け放しの子沢山 淡舟
出戻りは下駄箱までも邪魔にされ 牛歩
下駄箱えかかしてきてはらしまへん 竹莊
妻と来た下駄箱妻と共に老け 扇下
下駄箱にあるは鼻緒が切れて居り 梨里
下駄箱にとんぼを入れる裸の子 愛論
下駄箱に彼女の頃の靴と下駄 季贊
失踪の記事下駄箱に靴がなく 紅山
下駄箱へ草履が並ぶお茶の会 竹莊
下駄箱もいたんで妻の倦怠期 綠雨
病欠の靴下駄箱でカビが生え 没食子
下駄箱の上にもよくハイヒール 紫香
下駄箱は親の代から替らない いわを
下駄箱へ斜に入れる男の子 紫香
下駄箱に長靴だけは放り出され 梅里
二階借して下駄箱が邪魔になり 鉄兒

下駄箱の隅で靴墨固くなり 紫香
下駄箱が拭き込んであり老夫婦 喜久堂
婚式の時の草履は上の段 黙平
下駄箱の上や、こしい風の糸 梅志
別荘の下駄箱に這ふかたつむり 鮎美
うちの桐下駄箱位しかならず 古方

兼題「保険金」 須崎 豆秋選

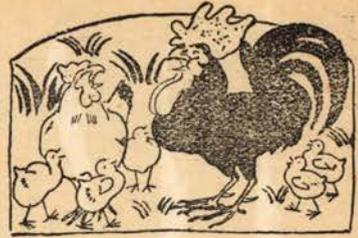
火事見舞保険の高をそつと聞き 葉光
保険金いとはとこが泣きどく 梅里
親類にあてにされてる保険金 竹莊
焼け石に水でも嬉しい保険金 泡起
保険金で今度はヨウキリ建した 鮎美
保険金ほしさの養子とは知らず 十九平
保険金遺言通りに分けられず 愛論
保険金運に坐つて数える氣 萬樂
遺言の一つに保険金のこと 鉄兒
保険金まだ生きていた子が名乗り 紫香
保険金もろて淋しい夜となり 愛論
保険金淋しい金と知るや君 いわを
書置きの通りに分ける保険金 淡舟
保険金まだ死にさうもなく満期 風路
保険金やつとの事で手に入り 恒明
保険金老らくの恋してみなし 紅山
大正の金があわれな保険金 豆秋
保険金五万とは情けない生命 秋

席題「職人」 市場没食子選

わて等職人でつきかいて謙遜し 喜久堂
手の入れることを職人云い添える 翠光
歯が抜けてからの職人贈がきし 鮎美
職人はまだあの事に意地をもち 博也
職人の子で職人は嫁と云ふ 芦穂
職人の足は箒で拂つとき 竹莊
職人の職入呑んで帯るなり 紫香
冷酒を職入呑んで帯るなり 紫香
親方がいて職人はよく動き 博也
大工の子大工になる手を挙げる 黙平
職人の呑む打つ買ふの巾が効き 梅里
長男に希望をつなぎ職で生き 恒明

小兒科 内科 性病科 安岡醫院 安岡三四郎 道頓堀・日本橋南詰 東へ半丁浜側 電話南三三四六

職人の腕にのれんも繁昌し 春柳
職人の父が角帽大事がり 哲水
職人の好きな屋台へ灯が入り 同
職人の勘で切れ味きたえられ 扇下
職人のつむじ曲りをもて余し 梅里
先借をする職人の腕が冴え 葉光
職人の叱られさうな勞基法 萬樂
職人の黙つて座つた小半日 愛論
機械化職人としての意地が 鬮骨
間が抜けて来て職人寝るときめ 愛論
職人の血が金持に負けていず 水堂
職人といふ氣安さの膳につき 没食子
席題「空虚」 小川 恒明選
家出して今日も空虚な日を送り 牛歩
空虚なる瞳白痴美とか云えり 泡起
子の留守の空虚を蚊帳の中は 七郎
月影が消えて空虚につき当り 愛論
独り子の死父はほかんと坐り 淡舟
ぼんやりといふ宿直電話鳴る 萬樂
名も知らぬ花え空虚な目が走り 天貧
病室を訪えば空虚な眼と出遇ふ 同
ざや／＼と去んで空虚になつた室 よか後
空虚から道頓堀をのし歩き 夢裡
日どしが暗いて空虚は家を出る いわを
死別した空虚は酒の夜となり 博也
土壇場に來た放浪の瞳の空虚 黙平
コバルトの空へ空虚なタバコの輪 哲水



編輯局にて

▼燈火に親しむころになつたが、盛んに停電が続く。編輯は晝と夜との区別がないので、瓦斯の設備をしてゐる。停電の時など近所へ氣遣なほごに青白い光線が秋の夜空へ流れる。敗戦日本の文化面を存負うて起つ我が社の氣拂えの尋常でないことを知っていたたきたい▼前号も好評であつた。好評以外に編輯部のよろこびはないごまでも好評であつて欲しいために、時を惜しんでガンを張っている。一層の御愛読と御べんたつを祈る▼表紙は例によつて由比画伯をばはした▼久しぶりに句詠「川柳航路」を発表した。以前は私自身中心となつて喋べりまくつたものであるが近頃は私はあまり喋べらぬやうにして

最短時間を結ぶ
大阪！名古屋
3時間 特急
 毎日3往復
 定期料 100
 特急料 7.40
 本町發 12.40
 名古屋發 16.40
 名古屋發 8.00
 13.00
 17.00

自轉車は
シマノの
3.3.3号

 Made in Japan

川柳雜誌 第六卷 第十号
 一册 金三〇〇円
 送料(三三〇) 金一九八円
 半ヶ年概算 金三九六円
 一ヶ年概算 金三九六円
 昭和廿六年 九月廿五日印刷
 昭和廿六年 十月一日発行
 大阪市住吉區南有代四丁目二番地
 行田屋 麻生 幸二郎
 發行所 **川柳雜誌社**
 振替口座 大阪 七五〇五〇

いる。出来るだけ皆に喋べつてもらいたいからである。喋べることは、同時にある。喋べる人の勉強でもあるからである▼福田山雨楼氏が作家論「黒本芳泉」を寄稿された。斯うした評論は作家自身にとつても、あとに続く作家にとつても非常に参考になつてゐると思ふ。前田五健氏や三條東洋樵氏や大西野介氏等にも盛んに作家論に筆を執つてもらいたいと思ふ。山雨楼氏も勿論筆を続けて後進をシゲキしてくれらるゝことと思ふ。さし詰めて藤本満年氏あたりは直原七面山あたりを論じてもらいたいと思つてゐる。もう一歩すすめて後輩が先輩の足跡を探ぐるのも面白いだろう。▼東野大八氏が軽い随物として「笑鏡」題ばなしを寄せられた▼藤本満年氏は「男性の更

晴れの御婚儀は

長生殿
 六階
松坂屋
 大阪日本橋 南一七二

募 集
課題吟募集
 一泊(十句) 菊沢小松園選
 女將(十句) 古川麗花麗選
 仲人(十句) 夷 一笑選
 集金(十句) 川村好郎選
 (十月廿五日締切)
毎号募集
 近作柳櫻雜詠廿句 麻生路郎選
 川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
 文章(評論・研究・感想其他)
投稿規定
 ▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
 ▼「近作柳塔」は一般作家の雑吟を募る。
 ▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。
 ▼「川柳塔」への投句は不朽洞全員に限る。
 B列5号 毎月一回一日発行
 郵轉禁) 半ヶ年概算 金一九八円
 一ヶ年概算 金三九六円
 昭和廿六年 十月一日発行